



三書回廊

特43
82

凡悩の犬、加載の肉と喰ふと西哲の確言實宣ふをどきどきと迷ひしる不良
 道小路落て、後世の穢き者多し然るが中にも、其名も其修離
 の解と繪の、先頃掲裁し中里信行が赤繩契ひ、書を余所情婦
 を妻と定め、巨小深き厚情と感、夫を中み争ふも、心、毫もあつた
 解語、雨花、高き義事貞操節義を守りて、夏年を送る兩女の
 實意は愛て、若子や婦女等、小庭訓の種と思ひ付、備ふ書肆が
 趣向と迂生間、成せし其緒、添て主人曰然、不端書城と
 依頼、俛辞、拙た筆、ふ斯を識

明治十七年

南柯奇夢



庸書齋

行信妻 於菊



中里行信



寶齊 國玉圖

豊倉の娼妓小半



再出貞婦於菊



寶舟堂

籬の菊操加々見

東京 小宮山五郎編

○第一章

移らふも憎白砂の色あれやと頼阿法師の詠れたる籬の菊の夫あらで現今横濱戸部町
ある天神山の片傍りよて辛苦の中甲斐しく所天の病氣を介抱しまだあせやらぬ
白菊の姿貌も見返らすそが本復を身も換て神も佛も願事を掛てそ頼む其人の來歴
如何よと聞かせば舊幕府世盛りの頃三番町に住居して不足といふ何一ツ夢も知
らで世を送る中甲何某と呼ぶ旗本あり夫婦の中は兩人の男の子を儲けしるは惣領次
男の隔てなく何れも文武の道を學ませ末の出世を老樂いと頼むしく暮すうち尾州
家の藩中よて細川何某といふ者の藩士でこそあれ祿高も多く領する身分といひ殊よ
内縁ある者ゆる次男行信(四十二)を養子よと言入たるを幸ひよ早速承知の旨を答へ頼
て同家の惣領娘お菊(二十九)と愛度祝言を濟せて後日翌男及び夫婦の其中如何よ

やあらんと氣遣ひしよ愈々睦み親しむとの便りも漸々安心せしむるべとの親の情を
らん扱行信の其翌年部屋住より召出され奉職の身とありければ是も養父の年來の勤
功に依ての事と思へば一層勉強し入てハ孝出てハ忠と聖の教の兩道を只赤心の一筋
堅く守つて怠らざるより自然と長上の人々に頼める壯年と賞賛されて最負を受け
間も亦く又も榮轉の命を受たる行信の人勝れ立身出世を小人の習慣とて日來懇
意に往復する舊同僚の松永竹田岩本などいふ若侍のいと妬まじき事と思ひ滋々入
魂を結ぶとの事又假託行信を誘引出して内々何か落度を構へんと工らむ事の履
くあれど此方の疾より承知して餘儀なく連立事ある故例も程よくあやかしつ殊深慮
の奸策も兼ねば松永等の遺憾も思ひ或日三人打奇て種々協議を凝した後如何伶俐の
行信ありとも馴ぬ場所故今度こそ思ふ存分耻辱を被與へて是迄我々が計略のうちを
大膽よものさし恨を晴してくれんと尚も手筈を謀し合せ夫より三人連立て行信方へ
尋ね行入し振よて何處ぞへ行き一職汲んと促す又の心も思ひし若氣の常とて

行信の否まば渠等も臆せしと笑へれんも残念と頼も支度を開へて市ヶ谷ある屋敷を
立出四谷通の或割烹店よて暫く歇つ剛へつして互に奥に居たりしが酔も乗じて松永
が是から一寸新宿へ遊興へ行ふと言出したを刀の手前夫のみといつは替つて岩本
の斷りしより喧嘩とあり一時の扱も合せん轡子も行信も驚いて竹田と俱々中へ入り
漸々一人を押宥めても松永の承知せず一旦口外した上の刀も掛ても武士の言分是非
とも立て貰ふと言募られて行信ハ別て迷惑したあれど今とまつて免れぬ場合と
誰々承知せしゆゑ仕課せたりと三人が目交で夫と點頭合然バ時刻の延ぬうちと遂に
内藤新宿の豊倉といふ女郎屋へ四人一坐で押上り銘々偶妓を定めたる中も獨行信
の噂も聞のみ目前見るの今宵の初めての座敷のの大陽氣も外飾の場所といふのら
の迂潤を事を仕出して恥をのいての同僚の前へ對して氣の毒と遠慮のちよて口さへ
利す只黙然として居て見て取る此方の思ふ坪と行信の中も取巻細川氏への何事も能
辨へてお在との豫て支配の方々のら夏蠅程も承つたイヤ左様も野暮の置て元より

愚昧の小子が及ばぬ所の百も承知を願ふも此座の一興一寸陽氣は一拳参らふ成程夫のよい趣向負た物への盃のオ、有く是の宜と盃洗取て差向れば何れへありとお酌の拙者サア、早く遣給へナニは存の無とやら夫の近來は遠慮千萬能ある鷹の爪を隠すハテ扱夫も時と場所先生イヤサ細川氏如何したもの口々も飽迄嘲弄して掛るも扱の旨々渠の手は陥落しると行信の堪へ兼たる口惜とよ



思はず拳を握る處へ間の襖を徐ろよ開て此場へ立出し娼妓小半の朋輩始め一座の客へ會釋しつ私のお客の其様な意氣な騒へ出來あの上お酒もどうやら嫌ひの様子と言つゝ頓て行信の傍へ立寄モシ貴郎お苦しうで有ますのら少時部屋にての休息ハテマアいゝから入つしやいと無理よ手を取り先よ立替さん何卒堪忍してと莞爾笑ふ愛敬を跡に残して介抱しながら廊下傳ひよ行信を己が部屋へと連れて行く思ひ懸なき娼妓のその執成よ三人の是のどうだと顔を見合せ呆れる折柄ドヤと入来る多の女中等が貴郎方の偶妓も先刻のらお待兼サア、早くお部屋へと手取袖引無理やりよ設けの臥床へ押入て其儘枕を就せしと同じ初會の客よても温和と意地の悪いとい扱ひ振も異ると見え一座をしたる娼妓さへ小半の頼を承引て行信の爲よい様にと心を添しよ知れたり斯てその夜もはのくと明る間近くなりければ彼三人の支度を整へ細川氏のまだ起ぬか餘りと言ハ横着な一寸起しよ行てくれと頬膨らして急立るも前夜の事を嫉ましく思て彼是いふ事と見て取る仲居の可笑さを堪へて漸々眞顔よなり

オヤ皆さんのお忘れですの那方夕べのうち是非歸らねば不都合との仰せも一應
 申上て夫のらお歸しやしましたと言れてさうのと三人の又してもお先走りか忌々し
 い二才めだといと不興氣又立歸りしが少しの是で腹慰せまなつたと見えて其後の往
 來の元より途中よて面會しても行信も語も更も懸ずありしと爰もまた行信が迷よそ
 の身を誤まれる起因といふの別儀もあらず既も前もも説く如く最う堪
 忍も是までと思ひ詰たる危ふき場所を偶妓小半が計らひで無事な濟せ
 て吳た上部屋へ連てさせよ一諫め宥め
 て深切又歸してくれしを深く喜び早速行
 て禮を述べんと目録包よ土産物と添て翌日
 行信が新宿の豊倉屋へ出掛て行ハ女中の
 出迎へオヤ貴郎の昨夜のお客ようこそお
 出にありましたまづ一是へと案内され



彼の見通しへ通る間も此方いといきま
 り悪く漸々席よの着たれど是より何と言
 出して昨日の禮をまたものと心配するも
 道理あり

○ 第二章

遊廓の様子を知ぬ身の左もこそ有めと察
 せしか女中の再びやつて来てサア此方へ
 と小半の部屋へ案内すれば行信ハ小半よ向つて慇懃よ昨夜の禮を演了り是の甚だぶ
 しつけながら今日参つたまゐるし計り何卒受納して下されと持参なしたる土産物を小
 半の前へ差置て素人流儀又物堅く頭と下て行信も禮と述べられ得了の小半も是の計
 り挨拶も願よの出来ず居りしが赤らむ顔を漸々もさげ差するお世話も仕ませんよ改
 つて此様なお禮と頂戴仕ましては却つて恐入ますが切角の思召ゆゑ有難く頂戴をと



言も苦しき思ひ入とも此方の知ねバ音んで夫で拙者も安心致した然らバ直ニ歸宅致すと衣紋繕るひ行信が立に掛るをハツとい思へど得了もモシとも留め兼只今お茶をと氣を極處へ様子を知ぬ例の女中の大きき遅くなりましたサアお誂へを貴郎からマアか一ツと取て出す猪口を溢々取上て二杯三杯重ねしも廊のならひで飲ねバと思心よ行信が遠慮しながら飲出したので小半のホツと息を吐き夫より勉めて打解て世間の噂咄のら浮川竹の勸の事を悲さ可笑さ取交て語り出つゝ俱々いいと深切にもてなす故耳新しき咄も紛れツヒウかくと行信も思はず酒を飲過し寝とハなしは脇枕いつか其儘寝入しがフト目が醒て吃驚し慌てゝ身をバ起さんと傍を見ればコハ如何もハヤ行燈も有明の影はの暗き屏風の中その身の小半の手枕に添臥なしてゐるりかバ扱の今の夢よていと愈々驚く行信の顔と見詰て小半の打笑必ず見捨て下さんすなへ」世の俚言よ言通り悪い道よ入易くさーも又手堅さ行信も小半が一時の執成を嬉しく思ひし處から禮へ行しか縁となり昨日の遠慮の今日の無沙汰思へバ益なき

事をしたと其後の義理ある妻のお菊が切なる異見を耳も掛す勸向さへ打忘れ毎夜の様は小半の許へ通ひ詰るよ養父母の見下果たる渠の舉動斯てハ所詮家の爲娘の爲よもなるまじと質家へ厳しく掛合て遂に離縁の願ひも濟行信の面目あげよ中里家へ戻りたれど小半の事ハ忘られず尙も繁々通ひし揚句無分別も父の所有金四百圓餘を持出して其儘豊倉へ遣て行き小半の前と程よくつくるひ首尾能身受の咄と濟せ此上の天下晴立派よ家を持べきだが以前の養家の聞えもあれバ暫く此所で辛抱してと麹町貝坂邊の或裏屋と借受て思ひ合たる小半よ行信他の見る目も羨ましく迄いと睦ましくしてゐるとい疾雨親の聞込しも詮議立して騒いでい却て家の名折よなると知ぬ振して捨て置父の心の免よ角よ女心よ母親の嘆きの左こそと押量られぬ斯て幾日の過し折中里方の中口へ人品ものごし賤しおらぬ若き女が尋ね来て仔細あつて爰よてハ私の名前ハやされませんが内々よて奥様へ一寸お目よ懸りたく此由宜しく御披露と言ふ近頃住込だ下女の不審よ思ひながら餘儀なく斯と取次バ内儀ハ何やら

考へて何の兎もわれ客の間へお通しやせと言がまよ〜座敷へ通す程もなく唐紙を
開て立出る内儀と顔を見合せて婦人のワツと泣臥バ此方もハツと驚いて誰かと思へ
バお菊どの人をも連す只一人市ヶ谷からお在どの心懸りな其方の素振假令次男ハ引
取とも元より赤の他人でない私とお前の間柄遠慮のいらぬ何用の早く話して聞かせ
と言れてお菊の雨と降涙と漸々振拂ひ斯やたら未練な女とさぞお笑ひ遊ませうが
行信様の今度の仕末もお側居まど私が畢竟お世話の届がぬ故よ心得違を言され
譯就てハ夫等のお説を兼まど私の心中を明してお咄アたけれバ貴方の粹をお計ひで
行信様よ口一目どうぞ逢せて下されと膝は縫つて位付れ一度夫と定めたる男と思へ
バ那様お放蕩者よあつこのをも愛想を盡さず行信の跡と慕つて尋ねて來るか殊勝者
よと母親が内心嬉しく思ふよつけ又思ひ出す親子の事 心操さへ縁致さへ是程立派な
女とバ妻と定めて居るがら人も有ふよ泥水の中よ咲たる仇花よ心を移すのみならず
賊よ均き所業として親よ苦勞を懸るとハ冥利を知ぬ白痴者お菊の手前も面目さいと

親の返答も出來すよわたが思ひ返して涙とのみ込次男が斯る不所存を恨めせず今一
度逢て咄がしたいとの其方の優しい心体を聞てハ私が頼んでも堪え違て貰ひこそすれ
決して拒む譯ハ無れと逢せたいも行信よ親父の金を持出てと言ハアヤト驚く
お菊夫でハ若や其儘よ。オ、其驚きも道理千萬行方知すよあつたのと跡で知たる私
の仰天憎ら〜いやら悲〜いやら夫から後の片時も費さ心も泣ばかり案する母の心の
うち想像てと咽返り座よも堪らす泣臥バエ、遅かつた〜斯いふ事と知たならお別
れ申た翌日よもお目よ懸りよ來たものを然としてハ又餘りを短氣な事と狂氣の如く
身を震りて嘆しがお菊の何か心の中ト氣の付事有〜が俄に腕と改めて斯て
ハお目よも懸らねバ家で心配せぬうちよ私の直に歸ります此上の只御身を大事に寒
暑の時候をバ随分お厭ひ遊ばせと跡よ心の亂れ髪引る、思ひを振切て別を告るよ母
親も脚され身を起〜夫から最早歸りやるか晝といへど一人路心を付て行たがよい
と見送る母親見送らるゝお菊が心の千万無量互ひよ名残を惜みつゝさらばと漸々別

れしが其日も暮て翌日のハヤ黄昏も間もなき頃市ヶ谷なる細川方から急用と一た書面の有りと何事ならんと封緘を聞る間遅いと中里の母が手を取讀下せばナユ娘お菊事昨日宿へ断りな一お宅へ参つて戻つた後家出をなされた行信殿の行方をお尋ね申す迄の不孝ながらも身を隠すとの遺言いたして何れへか出掛一儘故手を別て諸方を穿鑿いたせども今だま在處が別らねば此段お舎の爲迄一一寸一筆申入と有よ吃驚母親がさらでも苦勞のゐる中よ又一層の心痛を重ねて一時の病氣ももならんとせ一そ氣の毒なる

○ 第三章

爰もまた行信の小半と二人貝坂も裏家住居のし居れど彼持出した金圓の遣ひ餘りの有る任せ見掛も寄す樂々と一年餘の暮一が坐一と喰へ山も空一と追々懐中淋しくあり斯くの此先覺束あし何か工夫を附ねばと手内職の相談をど近所の人よ聞合せ頻よ心配し出した頃の幕府大政を返上し續いと官軍江戸へ下り兎角世間の穩か

あらねば是ぞといふ手掛りもあく空しく月日を送るうち君の存亡如何あらんと忠義一圖よ思ひ詰たる彼幕臣の壯年輩が心々よ隊伍と組時宜も因たら官軍よ抗敵せんと騒立る中よも一層聞えたるの彰義隊の一群よて白の羽織も朱鞘の強刀いと勇一き姿あるを行信の見る度よ羨ましさ事よ思ひ我も旗下の片端なると色に添れて此様に日陰の身よのあり一かど聊か腕よ覺えある技藝とあたら捨果ん如何よも無念よ思ふありあられ手蔓も有あらば連盟を一て一骨折其を言譯に兩親へ詫て世間へ出んものと口よの言ねど心の中知る人も有か一と用よ假託家を出ての上野の邊を彼所此所と忍んで毎日彷徨たるが不圖出會たる一人の彰義隊士の其以前懇意よ一たる者ある故行信の大喜びで一別以來の挨拶も語少あよ演了り扱拙者も昨今の仔細有て涙々する身就ての貴殿の盡力よて同盟の儀の出来まじさか實と深く志願の處と言は彼方の異議をく承引夫よの斯々計ひ玉へ委細の明日本營よて良も執成申さんとて面會の手續等委しく教へて別れ一より足を空よ行信の我家へ歸りて小躍し我身を顯す時節到來

小半其方も喜んで一人ニコニコして居るを小半の始終聞畢つては身の出世と有からん決して否の申しませねと上野へお入りなされくの自由も他出もならぬとやら夫も當座の事ならば心細さを馳しくお留守を致しく居ませうが此頃近所の障では彰義隊と官軍との愈々軍よなるとの故若しさうなつて杖柱と頼む貴郎も萬一の事でも有た其時の私何としませうと思へば是がお別もあると覺悟を爲ませんではお喜びさへ申せぬ仕儀ひよん事もありましたと人目無れに縫い付何様でも入ると仰やれば跡へ残つておまゝかよ悲しい目と見やうより私死でまひますイ、エ生くの居ませんと心の丈をかき口説れ勇立たる行信も小半の情に牽され流石も是非とも言切ず餘儀なく四五日其儘延々ともなく日を経内或朝早く起出く五月の習ひと今日も亦終日雨に暮すのかと心もいと結ばると思ふ空を詠つ、小半と俱に陸ましく朝餉の膳に向ふ折火事よくと表の方行通人の喧しきよ此大雨は出火との心得難き事ありと怪みながら行信の急ぎ外戸へ立出れば忽地響く大砲の音よんりやことを始まり

といふ間あらせず立昇る烟と正しく上野方扱と愈々戦端と開き一事が勝敗と何れも有や聞まはし未確報と知ざるかと西よ東よ駈歩行人は就くと聞糺せと曰ふ最負の様々罵り合のみ判然ねばせめてと九段の坂迄と立戻つて支度とするを小半と見より慌て引留軍と聞て喫驚し何やら持病が發つた様子何處へも行て下ざるを斯いふ内も苦しいと息も絶氣に言寄れ出るにも出られず行信が起り居り氣を揉うち何時か其日も暮果て初更も過りと思ふ頃官軍遂に勝利と得て彰義隊の面々と多分之上野の露と消いと漸く事の分りしゆゑ行信と力を落さ若やと頼に思ひたる事さへ今と此仕末斯くて再度世に出ん志願と全く絶りとして夫より近所の依頼に任せ五六人の子供を預り手習師匠を始しが中々夫等の束脩位で二人が口を過し兼ねれば子供を返した其跡では溜息をのみ吐て居るを小半と傍のら慰めて貧苦を忍び甲斐なく敷立働くよ行信も嘲されては居るもの、斯る騒の中あれば子供さへ多分と付す兎角とるうち近所へも米薪其他の負債の出来て愈々生活に困るより小半の頼も心配して勤る語よ

面目ながら其意を任せて行信の遂に貝坂の住居を立退小半が實の伯母婿なる牛込天神町の常造といふ大工の家へ兩人で同居のゝが此家とて元より樂の身分でないゆゑ同町は雨露を凌ぐばかりの明家を借常造夫婦の世話になつて再度住居の定めが定め兼る手内職何をしなら宜らふと種々考へ居るうち先立ものゝ資本の金言れの義理でないなれど母は内々泣付て頼んで見やうと行信が常造に言合め手紙を持せて三番町の中里方へ使遣り返事如何と待て居ると頼て常造が歸り來てマアお喜びなさりませ貴郎の仰やる通りよまて母は様よお目よ懸り委敷お話を致さまてら暫時の涙も呉られて憎いと思へど親子の中まさか捨て置れねば如何よかまて遣ふけれと見らるゝ通り今度の騒で屋敷も追々取崩さ仕儀も因ら遠國へ行ねばならぬと此混雑家財を夫々賣中ゆる少も片が付ら私が一寸違ふ行故夫迄の骨折の何分お前も頼みますと頭を下て私へのお断ア、忽体ない以前ならば我々如き職人のお話處るでい有まゝいゝ時世時節と言乍ら變り果る現今のは身分とお察さすまて歸

りまゝの何の扱置其氣にて
 お心丈夫に思え召せ夫に就
 ても世の中に親程大事なものない小半其方も氣を付
 て些も早く旦那様の世も出
 るやうに立働さ母の様へお
 詫をまなと律義一途の常造が老の練言練
 返え又後程も参りますと四邊よ心を配り
 つゝ歸行たる後影を溜息つくく見送つ
 て頭を垂て行信がホロリと顔を後悔の涙
 そ眞實の心なる斯て翌日晝頃も母親が尋
 て來て見れば聞しは勝りたる貧苦の体よ



呆れ果漸々席より着たれど餘の事も語も出ず顔を背て居る体を見るよりいよいよ行信も面目をさへ破れたる疊へ頭を付しまゝ頼みの顔を揚得ぬに小半の實もも見て取てぬる茶をがらもお一ツと汲で差出す缺茶碗母の煎頭手も取て見懸た處での満足の道具も有ぬ瘦世帯は媚妓した身で殊勝もも能運添て居て呉たど何のよ付て子の爲を思ふいあべての親心頼て小半は打對ひ初對面の挨拶し過し昔の事件と今云出すも無益故夫等の話の止よして此先どうぞ未永く次男の力になつてくれ又此品の些少だが初めて會たしるし計り土産の代りと十五圓紙に包んで小半に渡せば其儘前へ差置て主人の後邊へ引下り顔を隠して泣居るなり

○ 第四章

其時母の行信の前へ小膝を邁ませて今日とぞく此様尋ねて来たの外でもない其方の若や細川のお菊の行方と知ぬのと問れて吃驚行信が我と忘れて顔を土お菊の行かど仰しやるの渠が何を致しましたか思ひる寄ぬ其お尋ね仔細包ます逐一よお聞せ

あされて下されと語忙しく問返せば母親の目をまばらに其方の機な不孝者でも一且瓦人と定めたる契を忘れず跡を慕ひ家出をした儘行方知す若や其方に逢たかと細川のらり數度の尋ね私も捨て置れぬ故實の内々聞て居る桃町具坂へ心にもなき人とし聞合せると四五日前何所へか引越たと使の歸つて後の話今の尋ねんのもなしと愈々お菊の兩親は氣の毒も思つて居るうち昨日内緒で人をよこし此所は居ると分つたから夫故わざく来た譯だ尋ねるお菊を知らぬとならば子として親を振捨た其方に元より用いなし長居の無益歸りますと口にい言と夫となく人を頼んで父親に早く詫をする様も其時此母も傍のら吃度執成との思ひと小半も知せ置今暫くと行信の涙ががらよ引留るとエ、何をされる退て居れと義理と意地とよ振切て見返りもせず立踰る心の中と察しての女心も堪り兼ツツと泣臥す小半の嘆き思ひの一層勝りなる主人行信も母親の影見ゆる迄伏拜みて僅の中は那樣よお年とめしたも此身の爲勿体ない事としたと滋々後悔して見ると恵んで行れた十五圓の金さへ手よも取兼て腕

拱ぬいて居たりしが今とあつては是非もあし此上ハオ、夫と泣居る小半と勵して早速其由常造よ告知せて安心させ切ては是と資本よも早く何のよ取付が身の言譯と行信の語よ實よもと點頭小半そんなら豫ての話し通り居酒屋を始めて見やうと既よ支度よ掛つゝ頃風の心地と打臥ゝ小半の病氣が段々重り四五日経の歴ぬ間よ枕も上らぬ容体となりしよ何れも驚いて俄よ醫者よ藥よと騒ぎ立しが其折ハハヤ手後よなりし故中々急よハ全快も覺束ないとの診斷よ途方よ暮ゝ行信ハ大事の金とハ思ひながら差當つたる小半の病氣よ母の惠の十五圓を一圓二圓と引出して藥料其他よ支拂つて少も早く快復をと祈る驗の無のみ何時の全く還ひ失し再度元の困窮よ立戻るゝへ嘆きなるゝ病人を抱へての其難澁を聞込ゝ母ハ流石黙然よ思ひ其後も父よ隠してハ三圓二圓と送るので漸く其日の看病と餬口をばして居るうち或日母より五圓の金よ手紙を添てよこしよを又しても有難い親の情と行信が幾度の書面を押載き封をどく〜と讀さしゝる母の手紙を力なげよ座傍へ置て太息つゝ折があつたら訃言

を母よ頼んで父上よや上んと思ひしよ明日よも家族を引纏め靜岡へ移住と有てハ夫等の望も叶はぬのみか貧苦の中の看病よ濟あひ事と思ひあつても情よ甘へて折々の母の惠を請るゝへ是が納めとあつて見れば差向迫る此當惑困つた事よ成行しと窮鬼よ其身と迫られてハ駿馬も奴馬よ劣るならひ文武の道よ暗からぬ行信も途方よ暮れ恨めしう書面をバ打眺めて居る折柄小半の重き枕と擡げ只今爰で伺へバ母の様から手紙が参つゝ様子で有まどが別よ變つゝ事件もと



案事あんじの語ことばは斯かく々と明あして言いひつら驚おどろいて若もしや病氣やまひは障さやりやせんと思おもへばわざく彼金かのかを小半こはんよ示しめして此通このとまり心こころも懸かけて下くだすつゝから何なんも變かはつゝ事ことはない心丈夫こころぢうぶよ寐ねて居ゐると慰なぐさめ置おしむ營座ていざのこと忽たちまち地夫ぢうぶも遣つかひ果はたし今いまの無心むしんを云いつてやる方かたさへ全く盡果つぎはてて盡ぬつぎぬの嘆なげきの涙なみだのみ斯かくて有あるべき事ことならねば行信ゆきのまの常遣夫婦つねぢうぶよ思おもふ次第しだいを委まかしく噤ひそし留とど守まもの世話せわと小半こはんの前まへを宜儀よろこよと頼たのみ置おいて夫それより日毎ひごと編笠あみがさで深ふかく人目ひとめと包つみ乍さら以前見せんまへぬし小謠こらたひを謠うたひ歩いてそこはかと土地とち定めず軒毎のきまの門かどよ立たつて合あひ力を些少せうせうづゝも受うけて戻もどり夫等それらでかつく病人びやうじんの看護かんごと口くちを過すして居ゐしが或日あるひ四谷鹽町よつやしほを破やぶれ扇あふぎで調子てうしを取立とりぬ聲こゑとバ張揚はりあげて此浦船このうらふねよと謠うたひつゝ傍かたへの戸口とぐちよ佇立たり立たり格子戸かぢり明ありて立出たちだる婦人めんなが盆ぼんよ幾千いくぢかの手てのうち載のりて差出さすを腰こしを屈かめて受取うけとりながら笠かさを傾かたむけ女の顔かほと見みるよりハツと吃驚びっくりし扇あふぎをかざして行過ゆるよ女をんなも不思議ふしぎよ思おもつたか後うしろ姿すがたを二三間さんげん見送みおくらるゝとも此方こなたへ知しらず如何いかして愛等あいぢうへ來きて居ゐるのと吾われを忘わすれて振返ふりかへるとさんよ双方さうほう顔見合かほあひせや、貴郎あやたの行信ゆきのまさま。さういふお前まへへお菊きくぢやないの愛あいで逢あはるといふ面

目めなさいといふ語ことばさへ耳みみよも入いれずマア兎うも角かくもと無理むりよ手てを取とり一間い間まへ通としてお菊きくのいそく主婦あんなよ斯かくと告知つげされバオヤさうで有ありましゝのど頓あがて其場そのばへ立出たち出し田口たぐちお定さだといふ者もので行信ゆきのまよ挨拶あいさつし何なにも兎ともあれお菊きくさまの愛あいよお在いての其次第そのしだいの私わたくしのらお話しはなしまどが委まかしい譯わけのら當人あたうじんのら緩々ゆる々ゆるお聞きなさいまじといふ間まも既すでよせさ上あがる涙なみだ呑のみ込み言出いひださり

○ 第五章

田口たぐちお定さだの涙なみだを拂はひ私わたくしの事ことへお菊きくさまの漸あらうの六むつの頃ころに奉公ほうこうよ出でましゝ處親ところなや様さまの氣きよ入いつて十年餘じゆんあまの思おもひ受首尾うけしゆび能よく下くだつて亭主ていしゆを持もちて愛あい入いり世帯せたいを持もち折をりも何なにのら何なに迄までお世話せわよなり死しんでもお思おもひ忘れわすれまいと其その后のち折々せりは機嫌きげんを伺うかひて居ゐますうちお菊きく様さまよハハ縁えんが有あつて貴郎あやたを良人りやうじんよお持もちなされお睦むつましくして在いつしやると聞傳きつたへてハ居ゐるゝまれお直なよも上あつてお喜よろこびとヤ上度あやたいと存ぞんじましゝが其頃そのころハ生憎あひだよ明日あすをもちぬ本夫ほんぶの大病たいびやう續ついて果敢はかなくなりましゝ夫等それらの混雜こんざつのゝくで三月四月みつぎよと其儘そのまよ伺うかひ

事も出来ませず氣計り様で居ませうと思ひ懸なくお菊様が尋ねてお出のお話よ實よ
吃驚しましこのみの貴郎よお逢なさらずば再度家へ歸らないと書置までもして出
の故探し當る夫迄のどうぞ隠して置いて呉と何と言ても承知なきよ夫でハどうも
親の様へ對して濟ぬと思ひまじこのが強て有べ死ぬと迄覺期なされこの語よ幸ひ今
でハ一人暮しそんなら兎も角御不自由を辛抱してお在遊ばせ及ばず乍ら私にも俱々
貴郎のお行方を心に懸て探しませうと夫より今日迄何方へもお菊様の御身を知せず
お置やの譯ですが斯してお遇遊ばそも日來念じる神佛のお蔭の何よ致してもお菊様
の御志願が届いて無かしお喜びサア一跡ハお久し振で緩々お漸なさいませ此上と
も私しもまたお力よなりまじと語り了つて座を立ばお菊ハ膝よ取纏り私の事ハお
定の漸で大概了解になりまじらふがシテまの貴郎の此お姿ハ如何いふ譯で此節ハ
何處よお在よなりまじか早く漸して聞せてと言れて何と返答さへ言に言れぬ身の零
落よ行信の語もなく差俯いて居りしが暫く有て顔を上げ今更言も面目なけれど實

ハ斯いふ譯合から此仕儀よ立到つてと小半に一時の難儀を救はれた次第から今ハ
牛込よ一緒よなつて貧しい中で病人の看護をして居ることを掻摘んで漸した後其方
の家出も薄々の聞込たれど右の譯ゆゑ探す事も出来あんだと愈々恥入良人の語よお
菊ハ始めて小半との中を聞て驚きしも其深切を深く感じて斯てハ夢中よなつたのも
万更無理とも言れぬと元來嫉み猜みのなきいと優しき心から明日とも云す是より
直小半さんのお宅へ行は看護をさせてよとお菊が切なる頼みといひ又お定まで右よ
左よ語を添て是程よ暮つてお在の事なれば是非ともお連遊ばして小半さんの御介抱
をお望み通りよおさせ遊ばせ貧しいも困しいも行ふと仰しやる御當人が承知の上
からの遠慮ハ却つて双方のお爲よ奇らぬと勧めらるよ面目赤くも行信の漸々夫と
承引て嬉し涙を振拂ひお菊を連れて牛込の詫住居へ戻りしが承知と云ど此体を今眼
前見たならば定めて呆れる事有ふと思へば直も病人よ引合せさへ爲兼て困じ果
たる行信が心遣ひを見て取てお菊ハ側へ座を進め少とも早く小半さんよ譯と漸して

逢せて下さいサツお一人で何様よかお淋しい事でしたら何卒早くといふ聲を眼る
ともなくうとくと病苦の勞れも知ず居る小半がフツと聞付てオヤお歸りにあり
ましとのと喜ぶ聲音も霞をわびて鳴る虫よりいと哀れ聞けけり行信の漸
々に立廻したる屏風をかいやり其方も兼々案事て居た先妻お菊に途中まで圖らず廻
り會た後まかゝの譯からして其意も任せて迎て來た故一寸懸念もなつてくれイヤ
其儘で大事ないと超上らんとするを押しへてお菊を呼寄れば小半の一目見るより
も病細りたる手を合せ奥様許して下されと言の跡の咽返りヨ、と計り泣沈むを
あまじひ噺を仕出しての結句病氣も障らふとお菊の故意と語少なよ此先ともは睦ま
しくと挨拶なして顔と背け同じく涙も暮たるを傍で見居る行信が心の中を想やら
るゝ扱もお菊の其日より懸慕ひたる我夫も廻り逢えし嬉しさから外飾も恥も打忘れ
小半の看病を第一は嫉妬念の尙更なく甚深切は世話をするので奇麗な口利たもの
と四五日経たら何様かと行信始め常造も小半の爲に内々の心配せし引換て家出を

した折持て出る頭部の飾りと貯蓄の金若干も藥の手當又ハ生計の足も惜氣もあ
く手放すのみの塩町も居るお定も頼んで木綿ながらも良人の衣類と又病人の着換な
どを買調へて與へるなど眞實見えし扱ひに言へ語に聊かも違はぬお菊の心懸と何れ
も感心する中ハ行信の分て猶その心底と深く喜び今の萬端心安と其後ハお菊の言
がまよゝ小半の療治に心を盡し厚く手當をしたりしるべきしも重き病苦も追々
も薄らぎて遂に全く快復し元の身体もなつた故丹精をした甲斐が有て私ハ實に嬉し
いとお菊の愈々隔意なく姉妹の思もて萬事小半と相談するも小半ハ始終喜び泣に袂
を濡して居たりしのが或日情々何やら考へ了つて打黙頭頓てお菊の衣類をバ借着な
しつゝ近所迄用足にと出掛し未四ツ前の事ありし書過既ハ八ツ頃になつても一
向歸らねばお菊の元より行信も知己の方を尋ねるやら近所の人ハ聞やらして頻も心
ろを痛めて居るうち何だの譯ハ知らないが小半さんハ家の前で大層泣てお在で
たが其儘何處へか行なすつたと不審に思つて見て居るといふ噂などの聞えるので行

信夫婦の愈々氣を揉若や二人の其前を氣の毒とでも思ひて短氣な心を起ししせぬの何にしても心ろ懸りと只管無事で戻るのをお菊の殊々待兼さるゝ小半の其日の黄昏より大さゝ遅刻なりましと歸つて來たを見るよりもお菊の飛立喜びて近所へ行とお言ゆゑ直よ戻つてお在だらふと思ひの外に遅いのら大概按事とぞいまいと言へ側より行信も何か途中で間違などの有た譯でいあつとのと二人揃つて尋ね聞優しき語よいといしく小半の悲とさやるせあけれど覺悟の事と涙を隠し遅くなつとの此次第と身賣の書面と前借の金百五十



圓を差出して勝手な所業と立腹も定めてあらふと存じましとのみ嘸ーやての承知がないと知ての獨斷違と恐れ入ますが身身を詰てお菊様の看病なすつて下されとお禮のまると一ツよ旦那様の厚情も報ゆる爲の此金子私の心を察しおれどうぞ受納下されて些少なながらも商法の資本なすつては夫婦でどうのお樂いゆ生計の立様偏へ願ひまするといふ折隣家の常造が知ぬ男と同道して免あさいと入來り只今小半のやと事私も萬端承知の上是る人と懇意を幸ひ頼んで早速定と辭必ずは辭退をされずは何卒小半の寸志を立てやつて下されと涙を汗と紛らて顔と拭へ彼男の私に内藤新宿の豊田屋といふ店の者小半さんの身賣の事を豫て懇意の常造どのが同道されての相相談主人も丁度其以前豊倉方で當人の様子に委敷知て居り夫等で直よ嘸ーが出來迎へてら此私が一緒に此方へ出ましたと語ると一々驚きながら聞了つて行信夫婦の急場の事返答も出來ず顔見合せて黙然たりしが斯迄事の熟しの上今更否むと否まれと行信の狼を改め何とも言ぬ忝けあい

と小半は向つて頭を下るを見るよりおきく堪り兼貴郎の禮を仰じやれやうの私か
何で此儘よと留むる語も無理ならねども是も當座の事をれバ夫より早く此金で好商法
をなされた後利益がわつたら其時身儘よさせて下さるが却つて小半も喜びませう
名残の盡ぬ若い衆さん早く〜と常造が心よ泣〜別路をわざと頻りよ急立れば小
半も夫と心付汚れし衣類その外疾よ仕末もして有ゆる其儘行信よ別を告またおき
くよの懇懃の跡の事を頼み置私しが今朝がさお借アし着く居る貴女のお目よ懸る氣で辭を
の様だがは錢別よ強く願つて戴きます切くは是を朝夕よ貴女のお目よ懸る氣で辭を
晴しく居ませう左様なさバお二人様隨分息災でと手をつかへ暇乞さへそこ〜に其
方も壯健で勤めく〜と見送る行信常造が聲を跡よ若い衆と連立く行小半が嘆きの
看客よろしく察したまへ

○ 第六章

新宿の豊田屋へ身を沈めて百五十圓の金を其儘行信よ渡〜小半が別れ〜る殊勝か

心と常造が執成す語よ否み兼おきくも漸々承知しく本意なき別をした後ようか〜
し〜の切角の小半が厚い心志よ背くばかりの此金も空しく散てしまふから少しも早
く商法よ始め〜渠よ安堵させんと牛込寺町の明家を繕ひ其所へ移りて行信が豫て志
願の居酒屋を開店しておきくと其も薄利益よて賣出すと忽地近所の評判よなり得意
の客も多く附けバ夫婦の念々脚が出て是も全く小半のお蔭と早速其由新宿へ知らせ
どして猶更よ家業大事と稼ぐうちおきく〜何時の懐妊し月満て易々と男の兒を産落
したので其名を豊次郎と名號つ〜お島といふ女中を置いて骨ハ折ても苦勞なく昨日の
貧苦を忘る〜迄其日を樂よ送つて居たが産後の肥立が悪い爲よ餘病が發つて妻のれ
きくが一時の餘程の重体よなり〜爲たれど其頃は藥料其他よ事を欠ねバ先段々と快
方よ赴く容態よあつた故行信の安心し或日店の隙を見て四谷邊まで仕入の爲よ行て
來るとして出掛るをおきく〜暫しと呼留め小半さんら手紙の度よお出の堅く無用
と言く來ますが豊田屋へ這入れた後の何様客子か私ハ夫のみ心よ懸り又先方でも病氣

をバ心配してお在ゆゑ禮と夫等の話を兼一寸逢て来て下さい店頭まで逢位の那の言
もの小半さんもまさの断りも被成まいのら何卒親しく様子を見て私よも安心を爲て
呉ろと床と這出強ての頼も行信も成程夫も道理故夫なら何ぞ土産を持兎よ角逢に行
て来やうと頼て衣服を更めて彼新宿の豊田屋へ尋ね行て如此と見世の女中に頼みけ
れば女中の暫し考へなごら廊下傳ひよ部屋の前お奈留さんのお部屋ですの只今見世
へお在のお客の此間此方へ住込だ小半といふ女郎衆よ一寸爰で逢せてくれ寺町のら
来た者だと言ハ解るとお言ですの體貴女が其以前小半さんと仰ーやつたろと思つて
お聞に参りまいたといふ語と聞き小半のお奈留ハオヤ私の事ですが寺町からどハ誰
だらふと首を傾けて考へたが忽地夫と氣が付てハツと思へど然わらぬ体ツレ〜以
前世話にあつた旦那、エ内容と樓主へ一應断つて此方へお連やしておくき何で尋
ねて来たのだらふと口で言へど喜びの色ハ面も顯るゝを扱ハと見て取店の女中夫
なら直よ案内と言つゝ小半の顔を見詰莞爾笑つて出行ーが頼て部屋へ連て来て互

よ安否と尋ね合うちも小半の今更よ恥さのみ先立て過よ一昔豊倉での事など思ひ
出されて顔と赤めて居たりーが斯ての話しも仕悪いと樓主へ隠して酒肴と整へお茶の
代と勤めなどして漸その後の様子を問つ問れつゝ居るうち倦ぬ別をいた者と久
一振での打解嘲に笑ひもすれば泣も一思の酒を飲過した辭も心の狂ひしか又ハ
小半が昨日よ替り造り立たる勤め姿の婀娜ある色香も舊情を坐よ思ひ出し、か行信
ハ夜と俱よ語り盡さん氣よあつて屢その由夫とあく言寄謎を心のうち疾よ小半の
解たあれど今とあつての樓主の手前足ら客に爲ますとも言出し悪く第一よ病氣て
居るお菊に對し未練と思へば苦しさを胸に包んで知ぬ形容程よく調子と取て居る折
柄見世にてお奈留さんお客様のお戻りといふ聲聞より行信の物をも言ず身を起し置
たる羽織を着やうととるゆゑ小半のアルと手に取て其お腹立の知りなごらお返しす
す私の心を少しハ愍然とモシ貴郎どうぞ察しくは機嫌克と顔とそむけて忍び音も鳴
や霜夜の虫ならで身の儘ならぬ籠の鳥夫もお菊へ義理立よ自ら求めた今日の歎きア

思ふまい泣まいと小半の早くも氣を取直七腹立粉れは行信の別も告す立歸ると其儘見世迄送り出しお菊さんへ宜敷と屹然言ひしたものの、流石は跡の慕れて我を忘れて暫くは影見送つて居る處へお奈留さんお客様は先刻のらお待兼と云れくアイと返辭さへ泣々興へ立入し其心底の懃然さを察しもやらす行信の何と思ひ憐れめたか妻の病氣も打忘を同宿中町の伊豆橋へ上つて同家の初筆女郎お米を一夜の妻と定め藝妓を場て騒ぎが男振さへ周旋さへ程よく遊ぶ行信の様子お米は渡世柄忽地浮氣の心が出て切て再會に呼たいと座敷が引て床の中いと心切は扱ひしより行信のその翌朝面目あげは我家へ戻り小半は逢た次第から斷りなし泊た譯の豊田屋を出た歸り途幼馴染の人は逢てツヒ其家へ引留られ思はず夜更になつた故案事乍らも歸らなんだとおさくの前と漸々言紛らししたものの、幾度か我と戒しめても兎角はお米の心切を忘れ兼たる處のら家業も事々閑され二度の三度の宜らふと二三日過て行信が仕入に假托家を出て暮るを待兼揚つて見るとお米はニコく傍へ坐り能忘れず

来て下すつゝアレお酌の私が爲すぞお召も私よ疊ませてと馴染の客へも是程は中々しまいと思ふ迄お米の厚い介抱を受けての争か堪るべき遂は行信の夢中になり店の事やおさくの病氣の振向もせず捨置て毎夜のやうに通ひ出しが此伊豆橋と豊田屋との親類の間柄よて若者や女中杯の絶えず往來をするのゆゑ互いに娼妓の噂をして誰さんよの斯いふお客何某さんへ此人と大層よくしく取居るなど頻よ彼是言離す其陰言と聞込だお米は大きよ驚い之夫なら那がお奈留さんの心を盡すお客のと一度は實は呆れされど先頃爲よなる人とお奈留も取れよ意趣の有は幸ひ爰で氣を揉せ恨と返して遣んものと夫より一層行信の遊興よ來る毎氣を付く貴重にするもお米が胸よ思ふ仔細が有ども知ねは愈々行信の内を外よ浮れ出し果は四五日位の流連くの痴話狂ひよ義理ある資本の金さへも今の大概遣ひ失しく一枚二枚と製へた衣類などを徐くと持出す迄に至りしが未目が覺す五六日例の居續けくボンヤリし乍ら進まぬ足を漸々に我家の前まで戻つて見ると店のビツシヤリにて有よ是ハ不思議と興へ

上つて様子と聞べ病臥るるお菊の重き枕と上げ恨めしうよ行信の顔を見詰て涙を
 拂ひ貴郎が今度の所業と強ては意見しませぬ日外恩ある小半さんよお逢なされ
 其夜より再び深くおなりなされ夫ゆゑ家よ入つしやらぬと一途よ思ひ込ましこの
 ら成程夫も無理のないと絶念て居ました然して何時迄お出でい差向家業の雇人
 のお島が馴て何様よのやつて居ますが行末の爲よならぬ知て有るよお金を置て
 別々頃と替り果るる未練な仕方夫で何よも成まいと小半さんよ恨んで見ま言
 儘にお通ひなさる貴郎も餘り分らないと夫是毎日心配して切て晝間のお歸りも成や
 うお嘆やしませうかと種々思ひ煩ひしが直に病氣に障つゝか此二三日の自用さへ足
 らぬ苦痛の其中で實に分らぬの人心律義な者と頼母敷思つて居ましたお嶋よ一昨日
 私かうとくとし居る暇も衣類の元より賣溜其他の品々を持出した限今以て行方
 が少しも知れせんから早速お報知やうたいと鹽町のお定と呼寄詞と嘯しく新宿へ
 迎へに上たら小半さんの先頃の病氣よくお客處ろの此節でいどつと床に就く居る

と旦那が出での委しい嘯を聞て歸つたお定の口上そんなら外よお馴染の出来ての事
 かと私の始めて知て途方よ暮今のお尋ねすべき的も無ればどうしたものと嘆くをお
 定が見兼ての慰め乍ら今も今坊を背負て薬取よ参つた處で有ますか餘りと言バ情な
 い貴郎のどうして其様氣よおありなされ第一よ此先何となさいますと苦痛を忘れ
 て妻のおきくが良人の爲と息を繼く語るを一々聞度よ驚く斗り行信の返答も出来
 ず呆れて居一がツト身を起して店の道具を念の爲にと見れば見る程那も此もの紛失
 よ是のと倍々吃驚一斯てハ所詮明日の店を明る譯よ行ず斯いう事なら持て出た
 金を残らぞ遣のぞよ残して歸れば宜つたと差向迫る當惑と面目おさに心のうち愚痴
 を並べて惘然たりしが何やら夫と考へて其儘おきくよ嘯もせず我家を出て伊豆橋
 のお米が許へ駈込でオヤ戻つてお出でたか嬉しい事といふを押へ中々其様譯でハ
 さい實の如此云々の災難に逢たので一時必至といふ場合就てハ近來氣の毒なれども
 是迄の馴染がひよ十圓斗只た今どうの工風を付て吳二三日経ば間違なく屹度揃へて

返すのら何卒〜と行信が拜まぬ斗りも頼み込を聞いていふ米も驚いて心配するかと
 思の外戯言いつちやア否でとよ四十か五十來と云てお客は何で私等が十圓處の十錢
 のお金も誰の貸もの先刻貴方が返る時いつの二三度立引た那残りの催促を仕やう
 と既に言懸たが今日の拂の漸々ゆるぎ懸然と思つて無言で居たのサ處へ何の情郎氣取
 で其様寝言の廢てもお呉と取ても付ぬ
 挨拶を聞より勃無と行信が其薄情を怒
 りいいたれど見損なつこの此方の落度
 と胸を摩つて立歸るを不肯ぐみ見世
 先へ送り出してお米の吹出し仲どん早
 く鹽をお撒を延喜の悪いと大聲で聞え
 よのしに怒鳴をば憎い所業と振向く機
 會にバット散る鹽花も身にかゝり



〇二
 る迷ひの雲今
 そ清潔に拂ふ
 べも是のゑる

いと怒りを堪へ悄然我家へ歸りたる

〇第七章

憤怒を堪へ行信が悄然我家へ
 歸るが否や何思ひけん剪刀もて弗つり鬚を根元よ
 り切落して病臥するおきくの前へ差出すを見るよ



り吃驚例のお定どおきくも俱又是の如何にと右も左も兩人が呆れて物も得言ぬを涙
 吞込行信が其驚きの道理だが先一通り身の懺悔と否でも有ふが聞てくれと面目あげ
 よ有し仕末と包藏さを話したり憎いお米の薄情と恨い〜が待て暫し妻の病氣も
 見返らす小半の義理も忘れ果るく放蕩をして見れば其報でも是程の恥辱と受るの知
 ら事欺して呼の渠の娼法を欺されて通つこの悉皆此身の誤りと思へば人の怨まを
 ず況てお島が持逃も私の留守にしからの事と今更氣が付ば愈々おきくと小半の前

へ野面く顔をも出せぬ時宜夫ゆる以後の世を渡る稼業の外何事も思ひ切らる此
 髪も免じて何卒堪へてくれお定どのよも重々心配させてお氣の毒だがお前から宜
 やうにおさく執成て下さるも後悔面に願ひをて詫入る言葉を開よりもおさくは嬉
 々く這寄て改心さへ爲て下され何で彼是いひませう只此上の勉強して小半さんよ
 此事の知れぬうちに少とも早く店を明て下さいませと喜ぶ様子を見るお定も同ト
 く安堵の思となま尙種々諫め諭ささて事の濟た上早速店の仕末とまやうと豫て
 自分が引合の多くの掛先と取行と夫ハ此間店の女中が何時も早い催促も残らず渡
 えて此通り判の坐つ受取を取て置くと突付らる何處へ行ても散々叱言を聞のみ
 一錢も手入ぬの當惑する眞人の苦心を見るよりも切角改心ま處で夫等の爲よ
 氣が狂ひ又遊興でも始る様でハ此さますく爲よならぬと病苦の中で妻のおさく
 が干々心砕きまが或日まはく行信が的ハ無きと何處へか工面の爲よ立出るそ
 の後影を見送つてお心がらとハ謂ながら嘸や便なく思召まてお在であらふと察ま

ハ如何に病氣でゐる身でも平氣で寐てハ居らぬ處る事の事ハ打明てさうぢや
 と起上り硯取出去摺墨も涙よハじ文の面漸々よまて記了る折柄お定が乳香を懷き
 何心なく歸つて來ると一寸爰へと呼寄て言んとしてハ言兼まを思ひ直まて扱言やう
 今更言まの義理でとないが良人の難儀を看過し兼餘儀なく其方頼むのだが評を
 委しく認めは是なる文を持參して如何か金子の無心をハ市ヶ谷の母様も詫て頼んで
 呉まいか病氣で無色ハ厚皮よも私が直行なまど何をいふよも此姿でととお菊が餘
 儀なき頼みを聞お定と夫ハと當惑せしが其心底の氣の毒さよ早速承知ハしたもの
 何分今迄の怨意よしておましたとも言悪まをハ二三日前よお目よ懸り始めて貴嬢が
 家出の事と今日の姿を知り積りで兎よ角お断して見ませう虚言も其場の方便との若
 露顯ハ其時ハ貴嬢のお口で宜様よと正直一途のお定が心よ夫是心配しあがらもお菊
 の文よ請取て其日よ直と市ヶ谷の細川方へ尋ね行き無沙汰の詫あど演ハ後ハ菊の事
 を嘸出し文よ渡して只管よ詫を頼むと兩親は始めて知ハ娘の行方とらハ良人と探

し當一緒になつて貧苦を忍び子まで擧たの愍然やと思へど今更戻れとも言れぬ世間の義理づくよ涙を餘所に紛らして父親より廿圓母の衣類も十圓を添てお定に渡し遣り親も背いた不孝娘の頼みを聞べき譯のあいの中へ這入たお前の顔と立る計りの此品物親子の縁も今日限りも切さしるしと呉てやれば以後の決して何様な泣ごとを言て來ても一切聴ねば其由を嚴しくお菊も言合め随分辛抱イヤ實乏をするの其身の爲だろらと通してくれろと母親がいふも苦き語の端々聞よお定は咽返り長坐の却つて嘆きの種と暇乞さへそこくよ彼品々と受取て頼での事よ寺町のお菊の家も戻り來て斯と斷せば信行もお定を厚く勞らひてお菊と俱に親々の情を深く喜ぶにつれ先立もの涙なり斯なりなれば信行の早速仕入は取掛つて再度店を明しより以前ほどよと至らぬど如何よか其日の生計かたとお菊の藥の手當等にはまづ困らなくありしかばお菊も是で安心と氣力の付た處から病氣も種なく平癒して今は起居も元の身よなるのみならず愛子の豊次郎も壯健に生育ハヤ物心のついて來たので行信の或日

の事お菊と何やら相談整へ店の品はいふよ及ばせ勝手道具や衣類まで残り五人は賣拂ひ夫婦身輕に扮装して小半常造お定へも只一言の相談をく何國ともなく旅立たり

第八章

爰の名に負ふ西根山往來も難き石坂とましく夜路の勞れ足よ歩行もいとと採取らぬ男女二人の旅人が互みよ助と勵まして乳よとねだる幼童を宥め賺しつ漸くよ西根の宿を二里餘り離れし此方の處まで辿り付る其時よ女はホツと息と吐き怕いと思ふ氣のせいの大層暗くなりましと身を震ひしと寄添へ夫も道理此邊の一層樹々の生茂り殊よ月さへ隠れた様子かういふ事なら早くとも手前の宿へ泊つたが結句氣樂で有たものを益なき事をしりしと悔む打柄何處より顯はれ出けん曲者が四人均しく手拭よ面を包んで行方を遮り路用の金いふよ及ばせ身ぐるみ脱で置て行け否と吐せば撫切こそ旅人如何だと強刀よ各自よ前へ突付る鋭き語を聞よりも女のアレへと身を背け男の後へ隠るを聲を立と身構なし此物騒な山中を首も承知の道中

筋をんち古手で怕がるなら何で夜路とどるものの人よも因らう馬鹿くしいと落付
 拂つて居るうちよも腰は帯たる一丁は兩手を掛て用心とるより賊等の夫と目配せし
 て論は無益だ疊んでしまへ才、合點と左右から斫て掛れば此方の騒がす心得ありと
 抜合せ一上一下と切結ぶ折しも出る月影に白刃の光り閃きて木魂に響く太刃の音丁
 々として物凄さよ女の齒の根も合ぬまで震へながらも男の安否子供よ怪我をさせま
 じと木影に身と隠しつゝ氣遣ふ處へ彼男が木の根は踵さハツタリと倒れる体と見
 るよりもハツと驚く其うちよ刃を潛つて起上り勢ひ以前よ十倍して踏込く切立る
 よ賊の手疵を負しと見え叶ぬと見言より早く右往左往に破落くつと逃るをヤハ
 カ此まゝに逃へせじと追駈れば怖さと忘れて女の飛出し馴ぬ山路は長おひの必ず
 無用よ遊ばせといふ聲聞て始て氣が付留まつて振り返り其方の怪我もいなんだか然
 りふ貴郎も無事かと互は顔と見合せて胸撫下せど女氣よ又仕返しよ來へせぬのと
 危ぶむ様子よ打笑ひ若やと思つて挿て來た此脇差が有からの木葉野郎が盛返し幾人

來やうと平氣を者ナニ是しきよと立上る左の足の血汐よ染り韓紅よ驚く女や、貴郎
 のお怪我をと言も了ら老泣臥しとも此男女の何者ぞ是なん行信夫婦よと本夫が手疵
 を受たるよお菊の痛く驚さしむる事でも無といふは僅に心と落付て斯くの山へ
 上るより爪先下りに小田原へ戻つて宿と求めるが心遣ひがなうらふとのお菊が強く
 勧むる語は元より急がぬ旅あればと行信の其意は任せ願て疵所を手拭よて假よ包ん
 で歩行を速め小田原へ引返し或旅人宿へ着し頃ハヤ亥刻過で有しのと稼業柄とて
 主人を始め下女まで厚く介抱とるよ夫婦の漸々安心しと云の儘は風呂よ入り食事を
 濟せて枕に着しが今まで左程よ思はざる疵所が俄よ痛み出し寐ても寐られず行信が
 苦痛の体よ氣を揉でお菊の宿屋の主人よ頼み付薬を貰ひさとして其夜の少しも眠ら
 ぬよ本夫の怪我の重らぬ機心配とるうち夜も明けハ早速近所の醫者を呼寄せ疵所を
 見せて療治を頼むと切口の些少なれど大事の血脈よ掛つて居るゆゑ五日や六日の療
 治では中々歩行も出來まいと言れて夫婦の落魄せしが詮方なければ其氣よなり療治

を受て居たるうち六日七日も疾過て十日餘り日と經くも一向効験のなきのみか路費
 の追々手薄となり此先四五日立しなら一二枚持て來る着換の衣類と賣ないでい愛よ
 も泊つて居られぬ次第如何したものへ行信が案じる心と慰めてナニ其時どの様よ
 も私が爰の主人は頼み乾度置て貰ひますとのらマア心配の止にして痛みを忘れるその
 爲よ少と戶外でもの覽なさい随分表は賑かですと俱よ泣音と押隠し二階の様へ蒲團
 を敷てお菊の本夫を其所へ坐らせ欄干よ凭せて往來を見せるも少しと氣晴しと思ひ
 付ての計らひと察しくいと行信の女房のりか無思慮悴よまでも此分ではどんあ
 憂目を見せるも知れよしな事と思ひ立この道中の爲よりと頻に後悔して居る傍
 へ何よも知ぬ豊次郎が漸々よ歩み寄り父ちやん戶外へ連れてツと香中に縋りてねだら
 れる其いぢらしさに堪餘て思はず堪來る恩愛の涙とお菊に知らせと返答もなす表
 の方見下す顔を情々と立止まりて見て居たる町人体の一人の男が打驚いて店頭へ急
 ぎ足に之駈込バ宿屋の主人の不審想にお前ハ留造親方か先刻からして表よ立ち私が

家の二階ばかり目ばたきもせず見詰る居る何の譯の呼込で聞と見やうと思つた處
 へテモ仰山も駈込様一体二階で如何のしよかと尋ぬる語を耳よも懸す表二階よ居る
 客ハ何様病人らしい様だが那客人の姓名ハ若や中里何某と宿帳へ記てない一寸
 調べと下せへと忙しき尋よ主人も駭き如何よも中里行信とナニ其通り書く有ると道
 理で能も似とお方と思つて居るが無理ハねへモシ女中さん氣の毒どが中里様の座敷
 へ行き留造で解らねへ繁太郎といふ者がお目通りを致し度と大急で取次を早く頼
 むといふ語よ譯り知ねと彼女中が二階へ上つて行信に斯と斷せば暫らく考へ繁太郎
 どの聞た名前何の兎もあれ違ませうと挨拶なしと元の座へ戻る間もさく案内よつれ
 腰を屈めく入來る留造障子の外へ手をつらへ若旦那様か久しぶりといふ類一目行信
 が見るより是いと面を赤らめ其方と井坂繁太郎思ひ懸ない此處で先く是へと呼入
 入り

ともこの井坂繁太郎は行信が幼少の折中里家へ侍入仕込聖堂への送り迎へや講武所
 行の供をいといと深切に世話をした故行信の両親もその志操を感心し追々取立く
 用人まで用ひしが故郷一人残しある母の病氣に詮方なく暇を貰つて立歸り
 の六年以前の事なるが間もなく母が死後名を留造と故めて魚屋の店を出し最初
 の自身は出前を持ち小田原中と駆廻りしも元來律義の性なれば得意の受も至つて宜
 く儲のうちに二三人の男を遣ふやうになり此節で親方と仲間の者も立られ女
 房お林もお光と云養女を貰つて睡ましく樂に生計の立に付け思ふなつと旦那様や
 お世話をしたは子様方も無
 事でお在さるかと片時心
 まわすれねど忙しき家業に
 手も放されれば只言暮して居
 たりしが圖す爰で信行も廻



り會する嬉しむから別を
 後の身の上咄を摘んで大概
 晰し了り又お菊にも初對面
 の挨拶なし留造の始終の様子を行信の咄
 しで聞く驚きこれと若いうちよは有がらの
 事と思へば推すも聞かず只その様に難詰とあ
 ざる中々くうのくと宿屋は長くお在で
 入費の嵩むばかりでなく養生にも事を關
 幸ひ不用の座敷もあり私方へ兎も角もれ出
 ますつゝ其上で緩々保養とあされましナニれ子さんが
 有ふとも遠慮ふ及ばぬ事宿屋の方も懇意の中私がい様に取計らつて置まそか
 らドレ一早速お迎への人と頼んでよこしませう左様なれば夫婦様一寸も免と蒙



りませと思を忘れぬ留造が力あく／＼立上り斯もお變りあざむきの昔を忍ぶ溜泪
 と一人呑込歸り行しが頼で二人の男を運き再び宿屋へ尋ねて来て主人と暫く相談し
 後行信を男は背負せ自分のお菊は附添て小田原驛の幸町三丁目の住居へ引取り夫
 より夫婦氣を捕へ疵養生に心を盡し又お菊豊次郎へも旅の勞れの出ぬようにと保養
 などを第一にばせて手厚く取扱ふにそ氣の毒とは思ながらも差向外は頼るべき方も
 無きば行信の否みもやらせ言ふ儘に爰は幾日を過そうち足の運びは自由ならぬど
 痛の追々薄らぎされば一人のみの親子三人悉皆世話よなるのみでの如何も冥理と
 知らぬ驛と或日留造の暇を見く是迄の深切を厚く謝して言出と縁其方又面會し爲
 ん難儀をせせに濟ご生痛み所も追々よまづ快方よの赴いさか何分起居が不自由よ
 豫て断しし靜岡の見込も一寸着兼れの尙暫くの厄介よならねばならぬ此身の上就て
 の折々見懸るゝ店の帳場も忙しい様子如何の夫など助させて少しありとも世話よな
 る禮を爲さいと思ふあれと何と爲くは吳まいかと言を汝よお菊も措寄り私とくも此

間から切てお宅の洗濯でもしたいと度々お頼みやせど如何し之其様失禮な事が願は
 れませうか何と云ても承知なき私ハ却つて困りますから何卒厚にその事をお
 内儀と断してと右左のら言寄りを留造も困り果て成程夫もは尤もそんなら明日か
 ら願ひますと漸々承知の挨拶は行信夫婦の喜んで其後の互み骨と折中よもあさく
 の洗濯を仕舞ハ以前習ひ得し三味線取て此家の妻女お光が近所で働いて来る彼淨瑠
 璃と浚つて遣り又ハ先の下稽古あとして遣ことか何時の間よのハット近所の評判に
 あり音々と謂ひ聲と謂ひ商賣人も及ばぬ藝私と今の師匠を下つて留造親方頼み込
 み那は新造も教へて貰ふ已も疾から其氣で居るとんなら一緒に頼まふと三人四人並
 立て留造まで言込町内の若者と聞てのあさくも断り兼何よも知ぬとは承知なら兎も
 角も一ませうと澁々夫と承引て毎夜稽古をして遣る事を聞傳へての忽地に子供を合
 せて十四五人弟子が出来ぬ留造は斯いふ驛あら事のこと晴て師匠をあらがるがい
 何も商法家作等ハ私が萬事引受ると行信よも相談の上同町の明家を借受見奇麗な繕

ろひておさくを其所へ移らせると四五日経か歴ぬ問ふ惣々二十八九人の弟子よなつ
く夫々から附届も餘分よ有ゆる思ひぬ藝で世を送るも身の薄命と絶念で折々店より
戻つて来る本夫を大事よ取別之夥多の弟子よ氣兼しつ是も偏よ留造が情よよれるも
のなりとおさくハ只管廻り居たり又行信も留造が店の帳合取締り渾て心得老實しく
立働々ハ同居の身あがらいと叮嚀よ取扱ハれ彼疵所の療養も一切渠が引受て只よき
様にと醫師よまで心と盡して頼んで呉さまハ常盤津の師匠で生計の立はと
に家さへ持せて呉さまと親身も及ばぬ留造の厚意よ仍て夫婦とも思ひも寄ぬ所に
て却つて樂まなりたりと甚嬌くハ思ひしび或日情々考へるよ其前世話になりし人
へ一言の斷りもさく馴し住居を振捨て爰まで遙々來りしハ畢竟先非後悔して父と母
との跡を慕ひ駿河の國へ尋ね行き不孝の罪を詫と後假令出入ハ叶ハれとも四季折々
の音信位ハせめて許して貰ハんと思ひ立てハ居たハまれを相談すれば今屢しと止ら
れるのハ知て居るハ首尾よく噺が届いた上歸つて厚く其人よ言譯せんも悪くハあら

じと事の趣きおさくよも承知させての事なるに途中で出會た災難の爲に今日まで日
と經ハハ實に餘儀なき事とハ言ハ疵所も追々癒りしよ如何よ氣樂がいよとて此儘
うのく暮してハ本の心よ背くのみの小半と始め其他の人よいよ不義理と重ぬ
る道理ニッヤ早速よ留造へ斷して思案をせねばならぬと心付たる行信が折を見合せ
留造よ甚だ自由のまハハ日外ヤした通りなきハ私の急速静岡へ行て來たいと思ふ
のだが何をいふよも夫婦ともまるく其方の世話よなりお蔭で漸く今日と送つて
行ける身になつたを今更勝手な所業と腹も立ふが推察して何卒暫時暇をくきと昔ハ
主と家來の中も今でハ思わぬ人と思へば頭を下て頼み入るを留造のまつくと手と
上させて會釋おし私も店の事よ紛きツヒ氣が付せに居ましよの夫の何より急務の事
少とも早くハ支度をと心よく承引て路用の金を幾千の紙よ包んで失禮ながらと渡と
を此方の受戴さ何のら何まで手厚い扱ハそんから一寸おさくよも聞て支度を仕や
うと立上るを屢しと留めつと氣の付て見ますると奥縁とお二人で入つしやるのも何

とやらチトは不都合と思ひますのらに無沙汰としお詫を兼ね私がお供を致し
て萬事よしな計らひませうと飽まで實意を立通と語ふ夫はと行信の思ひ懸ね驚
きしが夫婦で詫をさるより人を頼むが當然と内心困つて居た折ゆゑ夫の近來忝々
ない買の私から頼みたいと思つゝ事の度々なきと見すゝ稼業の忙しいを知てはど
うも言悪さ餘儀なく夫婦で出掛る積り然らば何卒と氣の毒さう頼んで頼ておき
くへも其由委しく話した翌日行信と留造と打連立て發足し無事に静岡へ着りけり

○ 第十 章

行信留造の一行の静岡へ着し後中里氏の駿東郡大平村といふ處に住居と定めて居る
どの事と漸々よして聞出しる兩人の喜び言ん方なく飛立ばかり尋ね行き直も
斯と案内を乞んとした留造が兎も角私先へ行て様子次第で迎へよ參れば貴郎の
暫時此處で待合せてお在なされと中里方の門前へ行信を待せ置き其身の一人勝手へ
廻り腰を屈めてこれくと元の名前で言込しに頓て中里の母親が勝手口より出來り

オヤお前の繁太郎よくマア尋ねて來てくれたと一間へ通して母親が一別以來の挨拶
のら變つた今の話を仕出し養花よ菓子よと整應と逢は直も行信の噂の出やうと思
の外一向家事の話とまないに留造のどのさのり無沙汰の詫や身の上の事とあそ
こ演了つくと殿様にも若旦那も無事でお暮遊ばすと尋ねる語も彼の事と
何とか早く言せとい心と元より氣も付ねば成程お前の知るまいが大旦那に去年の
暮此地で果敢なくなられの後の悴と二人差向ひ生憎悴の只た今買物よと出掛るが程
なく戻つて來やうのら緩りと休息しよの宜いと思ひも寄らぬ癖のみ言出さるゝに留
造の驚きながら其悔みをまゝ演などして居るうちも門外を待せし行信が嘸待遠で居
やうかと思へば夫も氣懸りゆゑ斯くの果しと膝を進め買の今日遙くとお尋ねやし
て參りしハト願ひが有ての事其願ひも外でもなく家出なさたは次男の行信さ
まの事よ付とされて母と打驚かナニ行信の事よ付願ひが有とい不思議を言分如何
してお前が行信の。そのは不審も尤も主従の縁の二世といふ俚言よ洩せ小田原で

斯様くの譚からして實の私御供を致し御門前へ先刻のら御待せしして置ました
が今での堅氣なられた上おきくさまとの其中御子さま迄も有る御身どうぞ夫等を
お察し遊ばし久し振にて御對面を私免トて幾重にもお聞濟を願ひまじ又御當人の
御様子と親しく御覽なされた上の亡殿様はお代りなき兄上様から御勘當をお許し
なされ之下さるやう憚りながら貴方より御執成下されさく兎も角お運ませうと願
て行信を呼入て親子無事での對面を餘所見る目も嬉しきと喜び勇む留造と打て替
つて母親と顔と背けて語も懸ねば行信も暫くと背しのみよと話も出来ぬを疊へ摺
付て困り果たる折も折旦那が歸りと下女が報知の間もなく兄義信がつりくと座
敷へ通つて此体を見るよりいとも不興氣の体よと傍に座を占つ其方の以前家よ居る
繁太郎でいながらし何用あつて今日よいたり我家へ尋ねて來りしぞと駭く弟と母
親を尻目よ懸けて尋ぬれば留造の恐るゝ前の次第を大概話し只管説を言入ると義
信の身を起し突然行信と取て押へ火に代つて此兄が不孝の折檻對へこのと持つる扇

子で打擲するよ何事と支へる留造母も俱く押止めて様子を聞か義信の怒れる聲
を振立てよしや母御の執成でも弟の勘當許す事罷り成らぬといふ譚のコレ弟よツク
聞け遊女狂ひよ家出をしたの若氣の上と許しませんが非人どまで零落之人の門邊
よ佇立つ合力受への何事を親兄弟の外聞は係る事とも知ざるの夫さへ有るよ今以
て目下の者の世話になり又その者を便りよして阿容く詫に來るさどと旁もつて
見下た心体其様卑劣を男とバ等の弟と言れやうぞ家出とせ一が一家の幸に向後我家
へ足踏みも決して爲せぬ疾歸へさハヤ立去と罵るも理の當然よ母親と止め何づ
きも何んと返すべき語もなく黙然と一が何思ひけん義信はツト座と立て奥の間
より金銀にて鑄めたる一刀取出し席へ戻り親の死も目も知らぬ者へ遺物を遣るも異
なものなきぞ探て其方の所望せし父御の秘藏のこの一刀を今改めて兄弟の縁を切た
る其印よ其方よ遺をば父上とも思つて大事よ所持せよと行信の前へ差置き母上よ
れと手を取て障子さく切義信が奥へ入たる後影涙ながらよ見送る行信とと覺悟を

定めつ、彼一刀を取るより早
 く担くつろげ、脇腹へアッヤ
 グワヤリ突立んとする。驚く
 留造が慌て、抱き止む。ばこ
 の物音と聞つけ、母も吃驚飛
 でて危く刀と拾取て涙と聲
 を曇らせながら一圖よそと
 思ひ詰るも無理でないが日
 來から父御の氣性を其まゝの
 那兄さんの頑固を知て居なが
 ら死ふといひお前に似合ぬ短
 氣を業所殊は是なる一刀を遣さ
 るも死で言譯をしろと



の謎で、あるまいよよく〜心と落付けて篤と勘考したが宜いまた是程の事あるを
 現在母が側居く一言ぐらゐの義信へ執成ても宜らふと定めて怨みもしやうあれど
 兄さんも言を通り目下のイヤサ目立た事でもなくとも其うちよ又よい折も有ふゆゑ
 兎も角今日の歸るが宜いと言ふも苦しき母親の前後揃ひぬ語をば夫と察して打黙頭
 傍に置た一刀を拭ひ清めて留造が此業物でスツパリと一旦縁の切ふとも事を果し
 其時の矢張元のト鞘へ納めんとせんかものでせうと腰よさみ立上れば心付
 る行信の詮方あく〜母は向ひ随分御身を大切よ兄上も宜しふと暇乞して留造の
 跡は附添ひ歸り行く本意なき心を想像る母の歎きハ如何あらん看客宜しく察とべ
 扱行信留造の翌日とごとく小田原へ戻つて斯と物語をバ吉左右如何よと待兼一お菊
 の元よりお林まで痛く力の落しながらも父の遺物と持歸つた彼一刀よ些少の心を慰
 め居るうち或日のもと留造の例の通り若者と一所よまつく立働きの仕末と付ん
 ものと急いで土間へ飛下ると下にわつた出刃庖丁の切先直深く足へ貫ぬら夫の基

て煩らひ付き遂に果敢なくなつたので跡に残りし女房お林が悲歎の更あり行信も
 さくも俱に悲しみしが返らぬ事と絶念で野邊の送りを手厚く濟せ幸ひ今でハ行信が
 店の事よ馴たきバとお林が強ての頼みよ因り餘儀なく後見同様に萬事引受てやつて
 見ると思つたよりも繁忙よ別家して居るおさくの方へ寝泊りさへ出来兼ねれば心なら
 せも是まで通り奥の一間を借切て其所よ寐起をして居ると後家のお林の留造と遙の
 よ年も違つて居て女盛りの頃なれば俄よ本夫と別きたる閨淋しさ堪兼ふか何時の
 行信よ思を懸け帳場よ坐つて居る時や一間へ這入と体息の折など人目なき時の心わ
 り氣な素振を見せサヤホヤささるよ行信の困つた事の出来しこと迷感がつて居たり
 しとぞ

第 十 一 章

魚屋留藏が死た後も相替らぬ師匠として氣樂を暮しと餘外目よ見ゆれどおさくが
 心の中これが娘や子供のみ相手よしての事あれば別に氣兼ね及ばねど何をいふよも

この土地の若い者が七分ゆゑ偶に一盃つゞ合と言れる時の言辭と夜更までも三味線
 の稽古よ假托居られるを夫といふしよ斷つて歸す折の苦しさの折々本夫が戻る度
 よ否みを言れぬまひのど夫や是やを氣に懸てハ氣樂所の心配を却つて求めた心よ
 て尙其上よも近邊で悪き噂と立られまいと先頃より豊次郎の傳と稱へて下女と抱へ
 じごと人目と多々などして只管その身の用儀よ心を盡して居るそとも一向悟らぬ若
 い者の毎夜の様よ詰掛て稽古の付たり他の目的を我魁けよ達せんとお菊の機嫌をと
 りつゞよ餘計な物もど置て行き中よハ夫と直接に強面で言出と聲も追々出来て来た
 ららお菊の愈々氣と揉ではでハ所詮やり通せねば逐一斯と打明て廢る事よ斷をいや
 うと本夫の戻るを待て居ると引受て居る店の用が開がしいとて行信が迎へを遣ても
 歸らぬよ扱ハ此の聞込だ後家のお林と出来たといふ障も果して實説の否々夫ハ此
 方の迷ひまざるよ其様淫猥な事をささりもしまひ途つ追つ思案よ暮る夕間暮勝手口
 ら野鼠と上つて來たる足音を火鉢に恠れ情々と物を察じて居たお菊も耳にハ

入しが買物も遣下女が歸つと事と別語も懸せ居ると突然鬚を搔掻み引倒して
滅多打し打擲さるゝ又驚きてお菊のアルと振もぎり何者なるのと顔を見れば振作と
異名の有る喜太郎といふ土地の者にて彼の經師屋の一人ゆゑお前の何の意趣あつて
と尋ぬる語を半分聞きよくも己を振付けて權藏兄いと馴染たると又振上る拳の下を辛
くもお菊のい潜り思ひも寄ぬ言懸り其様浮氣を婦人といひ人が違ふと怒鳴付ても根
が振作の喜太郎おれは人の煽動を眞受た心の中を解やらせ又も無法に打て掛るを
堪へ兼て戸外へ飛出し亂暴者が飛込たのら皆さん何卒助けてとお菊の泣聲聞よりも
お師匠さん何のなすつゝソレソレ早く行て進ると近所の甲乙三三人駈付來よ吃
驚し雲を霞と喜太郎の其まゝ何處への逃去たゆる阿房の癖は憎い所業と何れも喋々
罵り合おきくを種々勞いつて介抱するうち行信も斯と聞ての捨置れずと頓て其場や
つて來て禮と演つゝ近所の人を歸しと跡まてお菊から尙も仔細を聞了りて見相變
て行信の立上りさぞ散々踏やら蹴やら手荒の折檻コゝ何ゆゑと絶り付おきくの給

髪のい掴み行信の尙聲暴らげ人の知ぬと思つて居やうが弟子の奴等と露のゐる囁の
疾よ聞て居れど篤ど實否と糺した上と今日まで捨て置た處こんな騒ぎとされるやう
でい否でも詮索せねばならぬ其權藏といふ奴の何處の者のヤア吐せ言ねば尙も辛さ
目よナニ合されくも覺えがないと夫あらずして言せるとて情容赦も荒繩と探るより
早くグルー一巻の傍の柱は括一付お菊これでも白状せぬのどうだ〜と問詰ると身
よ覺えあさ濡衣を争の諾と言ませうとお菊の返答も泣はるり口惜涙よ咽ふ處へ何氣
なく戻つて來下女が此体見るよりもイヤと吃驚豊次郎を抱き下とと其儘は慌て、
戸外へ飛出せば豊次郎の駈寄て母の袂に絶り付母ちやん何をかイタをしたの父さん
何卒の免よと執成す心のいぢらしさよ堪り兼たか思せもおきくハツツと泣出を聲を
餘所へ洩せと行信の口よ手を當エ、驚愕しい吼面せせと疾々白状しとらぬかとは是
までよあさ手荒の責苦も障も違はず後家のお林といつしか深さ中よあさり不人情よも
義理の有あさくよ愛想を盡しての此難題と眞實の此方の夢にも知らざれば身の潔白

をバ立んものと聲さへ立す右
 よ左とこの言譯を述る折しも
 下女の報知も後家のお林の進
 まぬ足も漸々と速めて此場へ
 駈付來り驚く体よて縛しめの
 繩解捨し介抱あしおきくさん
 よ何様な落度があつたの知り
 ませんが餘りと言へば非道な折檻爰の處
 は私よ任せマア一貴郎はお歸りなさい
 と立掛る行信を無埋よ戶外へ押出ば夫で
 は私の言解がと絶るおきくを引留てハテ
 その事は此私に及ばずながら引受ませう



と漸々二人を引分た後お林の種々賤し捲らへ兎も角恐れ入たどさへ仰一やつとさら
 濟む事ゆゑ此場の暫くさうおきくと言さくお菊の詮方なくとんなら何卒宜しくと挨拶
 授するに上首尾と喜ぶ心を色よも見せお林の體て立歸ると聞もなく再びやつと來
 た行信の懷中より離線狀を取り出し假令今まで何様な義理が有ふと密通をしる女と
 添くの居らきぬサア書付を渡そから死ぬともノメく歸るとも勝手よしと言はな
 し傍に泣居る豊次郎の手と取り戶外へ立出るよ是はと驚く妻のおきくの涙ながらよ
 駈寄く夫の貴郎のお間違へ決しく不義と致しんと何で私の子しませうと言へと噴
 げどいつのを聞かされた女よ用ないエ、蒼蠅と突放し格子戶外より細切と跡をも見
 ぞよ行信がお林の家へと急ぎ行くよおきくのクワツと氣も狂乱モウ是までと續いと
 駈出し本夫の跡を追掛るのと思ひの外よ路ひき違へ程遠からぬ早瀬川へ身を跳らし
 てザンブと水のあそれやうたかたのうてく消る覺悟よて合掌一つ、飛込なり

○ 第十二章

解話變つて新宿なる豊田屋かゝの娼妓小半(其頃お奈留)の行信が尋ねて来て其夜泊つて行くといふ素振のあれば此方でも實に嬉しく思ひしが樓主の聞えを憚るのみ
の夫でいおきくに濟きいと思ひ直して強面も客の有たを幸ひ送り歸ししもの
心懸つて堪られねば四五日過て夫となく禮の手紙をおきくまで出して無事ある
返辭と聞き聊安堵の思をよめて其ころ繁く通つて来る岡嶋政造といふ客の爲もな
るし第一は万事實意のある者ゆゑ大事の客と来る毎に勤めを離れて待遇うちト行
信が伊豆橋のお米の許へ足と近く通ふ事を聞込で小半の痛く呆きもし又胸を惱ま
まで殊の外に驚さし今の客人岡嶋の元お米の馴染なりしが朋友の交際で此豊田屋
へ上つた折り初會は出さか縁となり夫きおら後一向にお米の許へ立寄らぬを渠の
口惜く思つて居て早晩の意趣を返さなど人よも言ふとの噂をバ聞込だ事のあるゆゑ
迂濶な意見を言出して若行信が腹立紛きよ咄をさきての尙以て此身は仕向る面當か
ら手管でいよ行信を引寄るよ違ひなしさうある時却つて不爲人も有ふに恨み

あるお米は馴染を付ると困つ事になり行しと嘆きながらも他の者も明て言れぬ
内情のその心配は晝夜となく小半の一人氣を揉で只行信が改心一堅氣よなつて稼ぐ
様ど心の中で神佛は祈願と籠て居るり近來店での噂を聞かお米の大層通つて來
る牛込邊の客人の金が盡たよ愛想をつか散々恥をかへせ坏してとうく跡のら塩
花どハ随分手荒の薄情と取く悪く言て居るよ若もと思へば胸轟き早速使を牛込の
行信方へ遣く見ると間もさく使が戻つて来て彼居酒屋の代が替り前の戸主の四五日
前に家族ぐるみ遠國へ引込ごと今の店も雇ときて居る男の話し私も實に吃驚して直
その足で貴女の伯父は天神町の常造どのを尋ねて聞て見ましたら是も一向は存じな
いとて結局呆きくお在でしたと譯の知らねど使の者が本意なき体は物語りそこく
戻つて行く跡小半の夢も思はざる話しを聞て仰天ししやお米も誑されく資本を
遣ひ果したと面目さいと思ふとも只一言の相談位したと言ても宜らうに行信のまの
兎も角もおきくさんまで知らぬ顔との餘り不實な被成か然いふ中での有まどま

と怨みかちて暫くの泪に黑白も知らざりしが屹度心を取直し怨んごとも今更
先へ知をやらう譯のあし益なき嘆きを仕やらうよりさうぢや〜と絶念て夫より小半ハ
尙更よ客扱ひに心を用ひ別て例の岡嶋よ〜と心切に取成るので遂に身受の相談調
のひ愛度苦界と抜出て市ヶ谷田町仲通りへ小意氣な家を買ひ折〜泊り掛よて
来る旦那岡嶋を大切に樂々其日と送つて居ると或日伯母の何某が天神町から尋ね來
て其方よ早く見せた上喜ばそうと思ふ品と持て來たよと笑ひながら差出す手紙を何
氣なく請取小半も見らより莞爾オヤと言つゝ打開き目バたさもせを讀りて夫ぢや
ア今でハ小田原でおきくさんハ別よあり師匠をしくお在のたの私が上たお金を失
面目なまは兩親よせめ〜のお詫を濟せるを此身への言譯に歸つて話となさるとの
お心組で有〜と行信さまも似合ない餘り他人のなさき方トハ言まづ〜ハ安否
が分つて私ハ嬉しいと早くも心の解たる体に伯母も稍と安心して夫よ付てもお可哀
さうハ那お菊さんのお身の上お詫もどう〜叶とせに馴ない土地で其様な馴ぬ手業

をなさつゝあら又病氣が出ねばよいがと案事る心の同トにていとも優しき伯母と
姪その日の噂に暮し〜が早速返辭を差出さうと小半ハその夜机に向ひ筆を採しが情
〜と思ひ廻せば行信に受たる恩義の身賣をし〜一旦報いの仕〜と今も今の身体に
なる時によしや行方が知さねばとて無沙汰したる事なきば金に心が替つゝ杯と思
ひの爲まいが若万〜さう悪くても取〜の始終心よ懸るわけ夫よハ手紙で報知るよ
り逢て噺をしる方がと氣が付てハ返辭も出し兼そのま〜思案よ四五日を過すともな
く送るうち女心の慣習とて二晩續いてあり〜と夢見の悪さよ堪難く旦那の來るを
待兼〜隠さ手紙を見せた後この行信といふ人の私的身よハ思あるお方住所が爰に
ありますとはり小田原よて奥さまと別よなつて漸々よ其日を送つて居られる仕儀就
〜の何卒お尋ねやし印〜ばかりもお禮を〜てま〜の様子を見て來たいと兼々思つて
居ますと十日許り私ハがお暇を戴く譯に〜と言想さうに噺し出す小半の語を聞より
も岡嶋ハ黙頭之夫之近來奇特の頼み然いふ事ならずとも早く併〜其方一人での途中

の寔に氣遣ひゆる誰そ人を雇つて遣ふと云ハ小半の喜びなから夫よの幸ひ牛込の伯
 母も私し同様と思ふなつた者なきバ。オ、伯母様が一猪とあら私も大きき安心せる
 早速呼で支度をしろと異議
 なく承知をしてくれたよ小
 半の益々喜んで急ぎ伯母を
 呼よ遣り候ふ夫とも言悪さ
 ん虚言を吐て濟ないが斯々
 言くお暇と貰ひいよく行
 と定このら旦那の前を宜様
 よと言合めて禮などを言せ
 た翌日そんなら行て來ま
 そと暇を告げ伯母を力に小田原



□とさして小半が發足
 せし後の隣の爰も略さ
 とおきくの所夫
 行信のお林と譯
 ある處
 あら彼
 喜太郎
 の亂暴

をいよ汐にして不義と言立て離
 縁状まで渡したとも知らねバ心
 一筋よ身の濡衣の干のねしと口惜く
 思つと流れさへ早瀬の川へ身を投し
 が折よく下流へ漕下る夜網の船の漁
 夫が認めソレ投身よと櫓を早め辛くも
 救揚し上水を吐せと介抱せしにかきく
 の稍と吾に返り今の包ん術もなく涙ながらよ一伍一什を委しく嗚せバ漁夫等の夫で
 の死ぬ氣よあつたのもまんざら無理とハ言ないが死んでハ却つと潔白が立ぬ氣と落
 付て驚くりとマア思案さつしやれとて尙種々ハ説得し幸町の住居へとおきくハ送り
 届けられしが斯と知ての知らざるかお林ハ素より行信さへ尋ねても來ぬ不人情ハ聞
 傳へて見舞よ來た近所の人よが氣の毒のり此後とても其様な心得違のないやうよと



痛はり宥めく右よ左よ心を付て呉るのにかさくも漸々思ひ直し其夜ハ早く臥房入り翌朝一旦起出しも昨日の勢れよ心地悪しと再び枕よ着るが身の行末を考へればいよ心細くなり今更夫よ捨てられたと阿容一へ家へも歸られずまの鏡面皮歸る氣になつた處が今頃ハ定めくお國へ兩親ともお移住よあつた事ゆゑ女の身よ中々一人で遠い名古屋まで元より行やう譯もなし第一可愛い豊坊を那様邪慳な人の手よ掛るも愍然と思つて見れば死ぬにも死なれぬ此身の上コリヤ如何したら宜らふと歎きよ沈む床の海枕ハ泪よ浮ぶまで恨みのこちと居る折しもナトお尋ねやします中里さまの奥さんのお住居ハ此方でもかモシ免下さいと音信よ聲を聞付くハいと音つし若し氣よお菊ハヤヲ身を起し今この正しく婦人の聲音誰で有ふと不審ながら障子を明く顔よ見るよりマア如何してと驚きしも道理なきや今此所へ尋ねて來たは小半と伯母の兩人で頓て座に通り互ひよ無事の面會を語よ夫と喜べと小半ハ豫て氣よ懸る事よへわれハ摺寄て貴女ハ何やらお顔の色も常よ替つてお在のハ様子モヤ

昨今ハ心配の事でも有と仕ませんのと突然聞れて胸迫り何と返答も涙ぐむれさくの素振ハ合點行せと見と取る伯母ハ小半よ向ひ私ハ其所で今の物よ一寸と言て立上り戸外へ出ハ土産物を買ふよ假托この場をバ故意と外しよものならんとおさくも早く察したゆゑ堰來る泪を呑込で心切よ遠方と態く尋ねて下さつたよお出早よこの様な事とやすもお耻かしいが日外手紙を上た頃ハ先く無事で居る處打て變つて此節でハ斯いふ仕未と行信の受想盡しを委しく噺し夫ゆゑ昨日ハ覺悟と定め身と投このを折悪く人の目よ付き今日迄も斯くてくよ居まると身を震はせくの物語り聞度々よ呆をもし又の嘆きと想像り小半も俱よ泣臥し斯てハ果じと貌と改め心得難きと行信さま何が有ふとはほどよ貞操を立くお在の貴女をよくも糺さまは離縁杯といお心替りも程がわる幸ひ此所へ參つこのらハお目よ懸つて及ばずながら私ハ篤と御意見いたし貴女の安心おそよと様お執成を仕ませうと力を付いたものよ是にハ何の附者よあつての事よ違ひないと流石ソレ者の果だけよ夫と早くも察

しる小半の小首を傾けて思案央へ戻つて來る伯母と一寸と小蔭へ招き又も何やら言合め硯を借てさらりと書記したる一通を持たせて例の肴店お林が許へ遣はして是非とも旦那行信さまをお連やして來ておくれとおきくに住居を聞せなどし再び伯母を出し跡おきくの漸々顔を上げ夫等の禮を泪ながら話少な述了りツヒ身の上は肩托して貴女の今のお様子を尋ねずしも爲ませんで一が見ればお髪も變つたの好いお噺じがわつての事かと聞かれて小半も必付ホンよ然でありましたといふ折伯母よ誂へさせた土産の酒肴を持て來るゆゑ是のお世話と請取小半おきくの見るより氣の毒さうは是ハといふを押留め今旦那がぬ出でせうのらまづ夫までの緩りと久し振てドレお酌をナア私の身の上咄しの十三章の事といたさせせう

○ 第十三章

扱も小半の久し振ておきくと二人差向ひいと睦ましく獻酬す愛へを拂へ玉簪よおきくも少し元氣づき後といはず一寸あり何卒聞せて下さいと強て頼んで大概の小

半の今の身の上を聞了りて打喜び夫の寔よ仕合せ是といふのも平常のお心懸で有まどと語りふ折柄伯母が戻りマア皆さんお聞なさい體旦那が在だの旦那いやりい後家さんが手紙と見るより頬膨らし中里さんのお留守ゆゑ今もお歸りおされたならお目に懸ると溢く又請取た儘奥へ入りそんなら一寸お傳言をと言ても再び顔へ見せせ私腹が立つら一旦歸つて來まーといふは兩女の顔見合せテモ餘りなど呆れ一が小半の屹度思案して何様店が忙しいとて遠くもあひ此お宅へ暫く歸つて來られぬといひ必定後家のお林どのの譯が有ての事とせうと私にいよく察しましたの今も何んか沙汰次第ト言悪い事でもが斯々あすつては覽なさい夫もホンの少との間直旦那の氣の付やう其所と私の計らひまどと暫時何やら舞けばおきくいつく一考へて其心切の嬉しいの貴女の兎に角お世話をなさる岡島さんへ私が對し如何も夫でのお氣の毒といふを小半の打消てそんなことよハ構はない氣質と知て居ればこそ若もの時にとやした譯まづ一其氣でいらつしやいと後の事など

相談し伯母と三人三ツ鼎再び開く酒宴も偵女流の行儀よく漏り勝ある話を互に他
處へ紛らして行信の出掛くるの但し返辭をよすかと待間程なく店の男のへエ
先刻のお返辭と投込やうに置て行く跡から母ちやん逢ふかつたと豊次郎が駈込であ
きくよヒシト抱き付き喜ぶ顔の愛らしさに小半の思はずはふり落る涙と袖も押拭ひ
オ、坊ちやんか温和く大層大ききをありだと手を取り膝も抱上て此様を愛しい子供
の有る母はと敢なく振捨やうとは男心の然したものと思へばいと、愍然さも彌増
す小半の身も比べ又も涙もくれたりしが漸々も心付行信からの返辭をば様子如何よ
と讀下せばおさくらの何様を話を爲さか此方での既離縁とした女そこへ今更參
るべき筈の無ければ何事か用が有ら今夜も尋ねて来いと走り書も記してゐるを
繰返し讀了つてト息と否き小半の所詮是でいと心を定めてお菊も向ひ一先旦那のい
ふ通り離縁と受て私方へ一緒あると決心なさい假令この場が纏まつてもお林が近
所も居る時の焼木杭の世の譬矢張貴方の心配なるの知れて居ますからと勸む

る語の跡も付き伯母を結句の方が旦那の迷ひも早く覺め改心なるで有ませうと
言れとおさくも買にもと思ひ此上は小半さんのお心一ツに任せますと泣々承知の挨拶
と聞より小半の早速も行信方へ其由を念の爲にと繰り認め知らせてやれば此方で
いどうしやうとも一向もおさくの事には構とぬが豊次郎をも引取と有て捨ても
置れぬゆる養育料の代りとして些少ながらも其家もある衣類道具の遣はせから金に
するとも夫と隨意併し遠方御苦勞との返事と讀で債のおさくも腹も据兼ね勃然とせ
しを今となつての夫も無益マア、無事が肝要と小半の叔母と俱々もおさくを宥め
て其翌日家財を一切賣拂ひ斯あるからの少しも早く歸つて後の相談も掛るが何より
第一と又も小半の細々と思ひの丈を配し、と置手紙も行信方へ届けて置て近邊の弟
子達への夫となくおさくも一々暇乞を言せて萬事仕末を付け遂も小田原を出立せし
が覺悟のしても是迄の情に牽され泪ぐむおさくの心を想像りての路さへ更に歩取を
殊も子供を抱へての道中なれば岡の事と俱も小半も羨るゝと叔母の傍から諫め勵ま

し三日と経て漸々に彼の市ヶ谷の住居へ着と夫と聞より岡島が本宅から飛で来て無
事の戻りを喜んご後あさく親子の薄命を小半の話に委しく聞き夫の如何も便なき
事去ながら斯やつてお目に懸つた上からの及ばずおのらお力になりませば當分
の許も同居といへど何一ツ不自由もあく送るうち夫といふ少しも知らざりしがいつし
か本夫行信の種を宿して居たと見え此頃よての三月位る身体になりしに驚いて或日
小半に斯々と泣て話せば莞爾し臨月までよの間もあれは其様よ心配あさらすよナニ
夫までよハハ一緒よなれる様よ爲まよからと力を付ての置かど斯てハ愈ハ早急
よ何との話と付あいでハ嘸かし心苦しからふと只管たさくの心中を汲取る小半ハ小
田原へ又も手紙を出しなどして行信の改心するやう頼も骨を折て居るゆゑあさくも
も今の廻り来る時節を待より詮方をしと其後の成さけ泣顔を小半に見せぬ様よなし
又豊次郎と大切よ養育しよあさくはなまき月日を又も過すうち今日の朝より小止なく降

来る用よ小半を始めあさくの術さら物思ふ身につまされていとしく袖よ涙の露添
て淋しさ増る黄昏頃岡島さんの別宅ハ此方さまかどおとあさくもあさくの何の心
も付老執次よ出て打撃さハ貴郎は行信さまといふ聲裏で聞付た小半も此場へ飛で
出たまづハ是へと案内すよば行信と面目あげよ願と撫て扱いふ様オトした事で留
造の後家に馴染と處のら心が狂つて先頃の實に愛想を盡したが別れて見れば豊坊の
事さへ日々思ひ出し第一お林ハ邪魔よあるあさくを術よく追拂ひ自分一人と増長
して勝手なことのみに言募るよ始めて此身の迷ひが覺め悪い事をしよもの心付てハ
近所の人よ顔見らるよも恥かしく今更いはれた義理でハ無れど其方二人よ面會し倍
て見やうと思慮の處ハあさくの何やら懐妊との便りが有て居よ、まれを一寸の事
を麻よ取りお林と斷然手を切て鐵面皮さを漸々忍んで尋ねて來た譯さがどうか量
見して呉と後悔面よ顯はれて詫入る心の苦さを思慮をければ豊次郎は夫とも知
ら老絶り付き喜ぶよあさくのいざらしよあさくの元より小半さへ恨みも愚痴も打忘れ

改心せよと只管喜ぶのみの岡島の来るを待兼引合せ何この先の事どもを頼む小半の執成り今よ始めぬ深切と行信いふよ及ばず再び縁しを結ぶあさくハ分て嬉しく思ふなるべし扱行信の親子三人長く小半の世話なるも基氣の毒と思ふ折柄四五年以前懇意よりた石川清治といふ者が今でハ横濱野毛町に住つて居ると聞込一ゆゑ渠の元來慈愛ある者頼つて話をしたあらば又よい事も有ふると或日横濱へ尋ね行き達て話として見ると其零落を深く悲しみ幸ひ心當りが有ハ家族を連れて當分の我家へ同居なさるが宜と言きて此方ハ打喜び直戻つて此由を岡嶋始め小半へも逐一断せハ一同が夫ぞ出世の端緒と聊の安堵の思をして早速支度世話をし且用意よと幾千の金迄恵んで呉たのよ行信夫婦ハ是迄の禮を言兼しを兼ねハ此原意は嬉し涙の先立て腹乞さへよくも言得きさらばと計り別れしハ明治四年四月の事よて夫より横濱の石川方へ同居せしも二三日の事間もなく主人の周旋で居留地の商館へ六圓の月給にて書記役雇入れのハ手狭乍らも一軒の家と借て行信の滋々職務も勉

強するより同館の主人(英國人)なるナルトキス氏の氣に入て數句の中よ十五圓の月給よ引上られ其他に數多餘得の付身分よ早くも成し故更に同港相生町二丁目へ轉宅して格子戸造の意氣な住居よ下女迄置て使ふ程の昨日に替る樂な生計よあさくも漸々辛抱の甲斐が有たと喜んで愈々本夫よ貞節を盡と盡さぬ報いの靦面彼小田原の留藏後家お林ハ寢をよ姿よて何處で聞さか行信が商館から戻つて來て家へ這入と體に認め續いて突然揚り込オヤおさくさんハ一稽かと尻目よ懸て遠慮なく有合煙管を搦採て煙草盡と不敵の所業よあさくハ痛く驚きしが行信の夫と見て取腹と括て打笑ひ珍しいおさくさんの宜こそ尋くごさつこと態と優しく言語を此方ハ聞之せハ笑ひ餘り宜も來ませんご差向困る五十圓何卒貸て賞度イヤ何其様よあさくさん吃驚するよ及ません出來ぬと有ハ此方よも些言分ハ有まると思懸ない難題も疾よ覺悟の行信ハ打黙頭て座傍なる手箱の中ら取出し望の通と手よ渡せハ一圓二圓と三四回念を入て數へ了りコリヤ是のしが有柄ハ言どと知ハ手切の追錢。そいつハ近來ハ叮嚀左

様なればお喧しう又其内よと立歸る开も此ふりんの何故よ此邊あたりを彷徨かへ次章よ委しく書綴らん

○第十四章

放恣淫行極りなきふりんへ小田原の我家にて行信に別れし後暫しの元の嫡婦となり心淋しく暮し、が折々見世へ遊ひよ來る同じ仲間の彦七(九十二)といふ同驛よての兄イ株一寸さほひの男振よ早晚深く心を寄せ遂よ割なき中よなり人目を忍んでよりくよ怪しき夢と結ぶとの障の早くも近所に聞ぬ死んぞ留職親方の石塔汚しと罵るよおりんの却つて逆上あがり人を頼んで表向彼の彦七と入夫よあし是見よのしよ兩人が外へ出るよも連立く歩行はとよ睦しく見せ懸て居たるうち金の自由よなる處がら彦七の持病の博奕と最初いかりんよ秘し隠しでやつて居たれど運悪く追々外目が出て見ると如何せ激發だといふ氣にあり夫より後の敗北して歸る度には青溜や次第で因ての衣類道具を持出す様よあつて來よのでれりんは實に吃驚しよが若い亭主を持て

居く此くらゐの心配とするのど常と當分の爲るか隨意させて置くよ彦七の圖よ乘て資本の元より家財まで八分通り失しよ頃最う此前途と肝腎の目的がないと思つたか浮羅理と外へ出掛た限り四五日経ても歸つて來よ行方を探し尋ねても知をぬといふよれ林の呆を扱ひ今まで誰さきたかど漸く後悔して見ると商業どころか其日さへ送きぬ姿になつた上近所の人よのソレ見ると言さる辛さ悲しさよ小田原よも居惡くなり彦七が賣殘しよ些少の道具を捨賣よして是と路費よ娘と連れの無きと東京へお林が泣い出掛た途中神奈川にて圖らずも彦七よ出會しゆゑ此薄情男めと性來中で叫き立ると其腹立の道理よが是よの種よ譯ある事マア静かよして聞くくれと路傍の茶屋へお林を連込み何を言たか彦七の氣休め文句よ眞に請てさういふ事なら詮方も無いが最う那地への戻さないから如何か工夫よしてお呉と心の解よお林の語よそんなら一先横濱へ行き何よの思案よして見やうと夫より横濱長者町よて九尺長屋を借受て一時足を留めたものよ何よとるよも先に立つ資本の金よ差支へるを彦七の種

よ語を飾つてお林を説つて春は腹の換られぬと漸く親子は承知させ娘お光を高島町の天津樓といふ貸座敷へ廿圓の前借で十五になれば表向娼妓とするとの對談よて首尾よく該樓へ住込せて扱この金で商業の何と始めよものごらふと生れ古郷の小田原評議よ半月ばかり過すうち諸色の高い開港場で空しく日敷と費しよので娘を賣つよ廿圓もいつか遣ひ果した頃彦七が浮羅く相生町を通行しよ彼の行信の住居を見付よ旨い仕事が出来よと喜び我家へ戻つて斯くお林に嘸して何事か耳打すよば照頭お林そんな住居をして居るなら四十や五十の無いとい言をぬ彦さん宜よ心配せずと酒でも買て待てお在と朱に交れば赤くあるお林へ元來是程の毒婦よて非ざりよ此地へ來よから彦七の所業にざんく染たと見え其日の夕がた行信のよへ坐り込で五十圓まんま握つて歸つた事と既よ前章よ記したるが彦七は金と見るより頻よ手際を賞をよして祝ひの酒宴と名を付てお林よ散々強付て酔潰れしを彦七が篤と見定め舌うち大さよお世話と彼の金を其晩持逃したりし後と未よ行方が知をぬ

といふ斯とい夢よも白川の夜船よ乗た心地よてツッスリ寝込よその翌日や、寤頃に目が覺たお林の慌てよ起上り四邊を見れば彦七の影も見之ねよ五十圓の金さへもぬけの空財布是のど吃驚呆るよ處へハハ郵便と投込よ手紙の正しく彦七の手跡よいよく驚いと封をとくく讀下しナコ私が預つたよよくマア其様事が言るよ、口惜い如何仕様と足摺あして騒いでも跡の祭りよ詮方なく然とて今さら行信よ貸て呉とも言兼れよ或人に泣付て居留地の百六番館へ茶焙よ出して賞ひ天保五枚の十枚を箱との事で持歸り夫よて一人めつくに湯なり粥あり啜りてゐたが十二年七月流行した虎列刺病よ感染お林と果敢なく往生しよとど他國の土ともあり兼る見じめな体と聞傳へよ例のおさくが愍然に思ひ金と恵んで漸々よ野邊の送りよ營んで跡懇切よ吊ひしど是より先よ行信の思ひも奇らぬおりの爲よ多分の金を散財せよが餘儀なき事と絶念てますよ一實體よ勤めし故また一等昇給せしかよ愛から日々居留地へ通ふの不便と思ひ立早速元町四丁目へ立派よ住居を新築して相生町のら移る間もなくおさ

くハ月盈ち易々と男子を産落しこので名を信太郎と名号つゝ就てハ夫是の祝ひと兼
 東京に居る岡嶋と小半と呼で馳走をせんとおさくが枕直しの當日是非ともお出を願
 ふとの手紙を出すと小半を始め岡嶋も行信の追々出世としたるを喜び頼く二人で尋
 ね來く新宅開きと枕直しの祝ひと兼賑やかなる酒宴の席に連なりて其夜の爰に一
 夜を明し翌日東京へ立歸ると其後おさくの幸ひは何の障りも少しもなく子供と俱
 壯康よて日柄の立し行信は昨日の辛苦も忘るゝべりのいと喜しく思ひ居しが豫
 て夫限り疎遠したる母と兄への身の言譯を今の處で濟せず何時の日よかの望み
 を遂んと其由おさくと談合して自分で出向くが都合は宜きと何分商館の繁忙を知つ
 暇を下さとも言出惡き場合なきに此使の何者を頼んごものか差當り人の無の
 よ困るとの良人の語を道理とあきくも頼み氣を揉うち隣町に居るお定の事を出ひ出
 して打點頭那婦には種々世話になり心配までも懸た儘まご夫限よまつて居る故安心
 するやう手紙を遣り都合が宜きを來て貰つて是までの禮をした上渠と頼んで遣た

あら母親様よ見知の者定
 めて早く雙方の断がつくで
 有ませうといふに實ももと
 行信が早速これと決心しお
 定を遣て私の方が首尾よく
 事の届いた時に直に其方の
 親許へも氣の毒ながら手紙
 序にお定と又も頼ふと先の
 事など断を定めおさくも附
 附四ッ谷なるお定の許へ手
 紙を出し返辭返しと待て居
 思はせも経過しられども一向に音沙汰なればおさくより又も手紙を出しなごして



中里行信
 が今日
 の昨日
 かと言
 暮し二
 月餘り

如何した譯と待詫る折衝横濱へ商用よて出掛て來たど小半の旦那彼の岡嶋政造が尋ねて來るに喜ぶ行信おさくも嬉しく思ひつゝ酒肴など用意して頻に饗應す酒宴の聞政造は語を改め小半の話して大略の私の身分も御存知あらんが以前の大家と評判せし麴町の伊勢宗のよ支配人を暫く勤め其後四ツ谷天王横町へ世帯を持って妻と貰ひ夫より呉服類と商ひしが西洋物の流行から外國人と取引を始め小間物あどと賣始めしよ運よく今の身分になり小半も繋がる縁邊にて不思議も御夫婦と格別の御懇意を結びしからり此上とも万端相談いさしく就てハ貴殿の商館へ日々お勤めの事なれば自然利益の有さうな取引筋をお聞の節何卒お周旋を願ひさいといと打解し物語は行信と磯と手を拍夫なら差向幸ひの事こそわれと打笑は此方の元來商法よ手早き者ゆゑ聞捨すンテ幸ひの事とあると如何なる譯の斷されよと問れて行信座邊に有る手帳一冊取出し其取引の斯々で四五日前は拙者の主人が一萬二千圓餘よて悉皆取得た品なるが羅紗金巾を始めとして随分今の相場より下直の品と思ふなれば何處

そへ其まゝ賣込でも一箱足らざり利益の有ふと言ハ一々行信の手帳よ記し品書を篤と見たり岡島の成程これでは宜さ、うゆゑ幸ひ爰は持合せの五百圓と手金よ差し跡と今月下旬までの約定として斷を致さん。然らば是より御一所よ主人のさへお出われと猪口と收めて兩人が急ぎ連立居留地の彼の英人よ掛合と忽地密談が整ひしので此上の少しも早く賣込先を目付んと岡島の歸京し二三人の相手を目付け見込通ふ半口を賣捌いたと喜ぶ間もなく四五艘續いて同品の輸入の有し相場が下り残つた分ハ半價よも賣ぬ姿よ立到りしゆゑ是はと痛く心配する岡島の様子を見てハ周旋したる行信もいと氣の毒と思ふうちハ約定の期限となりしよ今さら否とも言兼て五千圓餘の金と工面し力なく、岡嶋が残りの品々引取りの爰で賣れば多分の損毛ざりとして長く仕舞て置くまご夫程の猶豫の無れば延か縮かやつと見やうと荷纏るひして神戸へ積出し自分も次の便船よて同地へ出帆しる跡使り如何にとおきくさへあんじ暮して居る處へ郵便にて届いた一通びてハ神戸の岡島からよこしものかと

手は採れば夫にのわらで塩町の田口よりとして有に是も同じく待兼た音信とおさく
 が開封し慌て、讀出と文言は養母とご事これ迄の厚くは恩もありと處る當春果敢ち
 く病死いたし就ての同人存生中小田原よりのは文通も早速返書を差上たいとやし續
 けて居ました折節病苦に取紛き心ならせも無沙汰は打過らち斯の次第宜敷お
 察し下され度また兼々おさくさまのお心懸るるは實家細川様よての名古屋表へ
 お出の後夫婦養子を遊ばされしが間もあく殿様興味も續いて此世をお去さされ
 跡とば養子何某のお身持が悪きとらよて今何處へお轉居ありしか當時の湯住居
 の一向分りやさる由右と養母が昨年中體は聞込居ま一たか斯とお報知や一たなら
 お菊さまの傷歎と想像きて痛ましけれ折を見合せやし上んと其儘にして居し處る
 最期の際私へ自然序も有一時の其よし委しくやし上よと吳々やし置しまし延引
 ながら返辭まで此段は承知下されたく養子田口辨藏よりと讀了りてアナヤとバの
 り打驚さしが忽地は堪來る涙は堪り得せワツと其場は付臥たるお菊の心を悼ましき

斯る處へ立歸りし主人行信が此体を見てコリヤ何ゆゑの愁嘆ぞやと問れて始めて氣
 が付一お菊の涙の顔を上げお定の許から郵便で返辭が來るゆゑ嬉しさを取る手返し
 と開封し見れば見るほど悲しき胸も張裂く事ばのりマア此文とと差出すをハテ心
 得ぬ於菊の語何事よやと行信が手は採上げて始め終り目ばたきもせず打見やり是はと
 痛く驚くばサア夫ゆゑは此歎き假令お目には懸ぬとて暗て手紙のとりやりとせめ
 てい爲たいと夫の心を是から先の樂みに思つて居たも情なや御兩親とも亡人の歎
 入さしのみならず幾代續きし細川の流きも今の絶ふりと思へば是も家出した此身
 の不孝も因る事ゆゑ草葉の蔭で皆さまがと跡いひさして泣沈むを實は道理と行信も
 我身の上にはひき比へ慰め兼て居りし今なら如何に歎くとも詮術なれば絶念て
 今日を親御の命日と跡懇切に吊らふが佛の爲と漸々に賺し宥めはしもの、斯てい
 駿河にお暮しなさる我親兄の身の上は如何あらんと想像てい氣遣としき堪られね
 ば何の扱置き一通り今の身分を書面よて母の許まで報知んと頓て細々書認め駿東郡

大平村へ充て書状を出し置き尙も勤めと大切は職んで居ると東京の四ツ谷の小半が常造と伯母をも連れて尋ねて来たのら行信夫婦は喜んで酒肴と支度とを小半は暫しと押止め今度斯く参つゝの神戸は居る政造方より急な此地へ来る様よと迎への人とよましの譯よて其仔細をば緩々とお断しやし上たけれど何を言ふも旅を抱へ心が急迫と言さして御息をのみ吐居たり

○第十五章

行信夫婦が久し振とて彼是心配とるのよば小半の暫しと押止めさう緩悠として居らぬ譯の御存知とばり先頃より神戸へ行し岡嶋のら急いで来いとこの迎へが来とので其仔細をお断しやせば日外旦那行信さまのお周旋をなされて下すつゝ彼品物の見込違ふ餘儀なく同地へ参りし處る那で何とうく千圓から全く損の爲ま一たぶその埋合せと買入れた西洋物が圖に當り遂に同港海岸通りへ店を開いてやつて見まと思つゝよりも上景氣是では結句此地よて生計を立てるが後の爲と是から急な私まで呼寄

られる事もあり實に今日只今のら郵便船に乗込む手都合夫ゆる暫く別れのお暇乞又出せしたといふ語を繼で常造が扱私し夫婦までも斯して一緒に参る譯の旦那さまよには存知の通り是なる小半の兩親の十年前は俱に世を去り其後の万事私が伯父と姪との間のら世話とすれば世話よもなり今でいまるで親子同様互ひは頼りよし居るを政造どのよも存知よて今度小半を呼よ付て一人身にての馴ぬ土地定めて渠も心細くも思ふ事であらふのら幸ひ都合が付くあらば其方も夫婦連立て俱に此地へ来たが宜とほ心切なるお書面を任せていよ同道と致すことよなりま一と様子委しく断すうちハヤ出帆の刻限に近づきしと一同が立かゝるのよ行信の夫の何より結構あれと餘りと言へば本意ない別をといふよおきくの堪り兼そんなら最早お發途でその兩親よと死分れ今まの姉妹同様頼りよ思ふ小半さんよと言きて小半も泪ぐみ人の老少不定との是ぎりお目よ懸る事の若や出来あゝその時よと吾を忘れて取絶るをコリヤ發途の幸先よ不吉の語と行信よ答められて氣の付く兩人ボンよと

爾莞笑ふさへ泣より辛さ心の言も盡さを見送り見返り名残惜氣も別れしよりお菊のいと世をはのきみ戀々として日を送るよ行信の心配して只管心の浮立やう諒め勵まし居たりしが豫て思わる政造の指を掛しの時節といへ知らぬ顔して打過ん如何も不快の事なれば渠も幾干か辨金し又二ツにのぶ菊も行末安心する様よ田地もあを買入たく夫よの所詮通例の取入よての中々に數年と経ても及ばぬ志留ハテ何をがあと思案最中その煩煩よ上景氣の彼の洋銀相場をばやつて見んと或人よ勸めらさよ行信も胸よ一物ある時ゆゑ早速これと組合て掛つて見ると見込通り忽地二十五六圓利益の有しよ乘氣よあり最う一番が三番とやればやる程その度よ十四五圓の所得が有るより此機と外さず大口よと今まで得る元利のみか館主からして預り居る七百圓餘の金と併せ買方は廻つてあせるうち狂ひ易さの相場の常昨日の景氣の何處へやら今日も明日もトントンと拍子よ高直に向ふ處のらコハ失錯と思ひ斷り今度は賣よ向つて見ると弱り目よ崇り目よの打て換つて下落なし四五日待を千

圓餘の金に全く散失しよぞ益なき事を爲さりしと我身の所有の物のみあら絶念のよも有べけれど半分過り館主の物ゆゑアノ吾ながらと行信の臍を噛でも今となり追付兼る當惑を始めて知らば菊の驚きは是れ胸と病めしが早くも身體よ障りしと見え二三日床よ付たので却つて歎きよ求めし夫ハ兎もあれ於菊にハ來月頃が臨月と産婆の診斷もあつさあか若や是等の事のらして流産させてハ一大事と商館へ出れば館主のら預り金の催促を言れはせぬかと心配も我家へ戻れば病人の容鉢等よ氣を揉で債の中里行信も三方四方よ氣兼とし安き心もあらざるうちよお菊の俄よ産の氣付さ易くまたも女の子を無事よ出産したりしものバ嘆きの中の喜びと頼く其見をお房とて名付し後は順當よ母子とも丈夫よ肥立一ゆゑ先一方は安心とホットと息と吐く間もなく洋銀よて損をし館主の金を取調を受けその言譯の立ざるより遂よ雇を解のさしハ明治十年の暮の事よ切角幾千の貯はへ金さへ損と一揚句本年漸々八歳よある豊次郎と頭よして信太郎とお房との幼兒三人ある中で勤めよ離れた行信の愁傷い

はんかたあけれど汝も出て汝も歸る身の失錯と絶念で悲しむお菊と賤し拵へ其内よ
 の何方へかまゝ取付て安心させれば少との中の辛抱と思つてヤナ〜案づるな万一
 困る事が有れば家作を賣つても百圓や百四五十圓の金と出来る心丈夫よして居ると
 言れて於菊は是までの事を思へば兩人の子供が殖たといふものゝ衣類其他諸道具ま
 で少しと出来居る事ゆゑ居喰よしても一年餘り夫等で凌ぎが付ふと夫より下女
 への暇を遣り昨日に替つて只管よいと儉約して暮して居たが隙行く駒の疾く過て其
 翌年も十二月明けは明治十二年はハヤ算へ日となりしゆゑ於菊の心も落つき兼ね或
 夜子供と寐のした後闇の埋火かき起しまゞ肌慣ぬ寒氣をバ所夫と兩人差向ひ暫し身
 中を煖めながら爲と事もなく浮〜と本年は何やら過しましゝが來春のらと房坊の
 寝入た間でも些少づゝ何か内職を仕ませうと吐息とゝも語り出とその言の葉の戸
 隙渡る風より痛く行信の身にまふ〜と透渡り頼も返答も出來兼し心苦しき切あさ
 と想像くハ氣の毒の事を爲〜りと氣の付て世間話も紛らから於菊の心は千万無身折

折響く野毛山の火定鐘は驚いて最う其様を時刻かと所天を驚めと俱〜と一ツ臥房
 に入りしかど物思ふ身の行信の寝られぬ儘に眞夜中まで一人越方行末の事をと慮じ
 て居る中於菊の晝の勞れもや何時かスヤ〜と寝入しゆゑ益なき事を思ふとふより早
 く眠つて翌朝の蚤も起出で内職の認め物に掛るも若じと勉めて夜具と引被りうと
 ととせ〜程こそあれ火事よ〜と耳元よ轟く近所の人聲を聞く行信の目を覺〜慌て
 と雨戸を開くが否やサト吹入る一陣の風へのあらで黒烟これ〜といふ間よのひ〜
 し〜おきくハ一人を脊中よ負ひ二人の子供の手を取て怪我させまじと駈出しが案よ
 り火急の事あれば漸々衣類と着更しのみ何一ツと持出さき跡も残つゝ行信も夜具
 と衣類を五六枚辛くも戸外へ運び出し再び取返し頃の中々家の四邊へも寄付兼
 る火勢ゆる心雄れと詮方なくアレよ〜と言バのり兎角とる間に隣家さへ俱にマ
 ヲナリ焼落て只見る一個の赤塊となり消〜そ是非もなき是なん同町(元町)五丁目
 なる糞米屋より出火せしよて他も類焼も多かりしと「爰は同港吉田町裏通りよて表

よりの一夜旅人の安宿と配て
 のあれど其實ハ怪しい女と
 抱へ置き春宵一刻千金の千
 分一を上客とし半圓二十銭
 の嫌ひなく色をに闇ぐ曖昧
 屋その店頭へ立留る二人の
 女の一人ハ此家の抱への姉
 へ株姉さん大層早のつたと
 奥より出て来た朋輩と見向きやらを
 突立てアお内儀お見えとい今
 も散々巡査の見て居る前で言れ
 通り一向覺えが無いといふよ濃

旅人宿



こくも店へ

すていつて來
 ての言掛り其

様よツペコ言のよ何ぞ證據が有ていせう拜見します見ませうのらトット、早く
 お出しなさいと口穢なく罵るよ打て換つて此方の女の年齢四十前後よて形粧ハ然ま
 だよ有ねども昔ゆかしき爪はづれ然のらよや物いひもいと穩かよ小腰を屈め店の女
 へ一體して別証據の無けれども覺えが無いとい言れまい七年以前よ牛込でと言つ
 四邊を幾度の見返り一段聲を低くさし証據くとい言が元來貸物ではなく持
 逃をし事なきべと言へ此方の勃然として又しくも特選呼はり成程牛込寺町で居
 酒屋でお在の頃私が暫く奉公して其後一應断りと言せよ出さゆる其機亦言掛りをお
 爲のさらふがお前さんと病氣中旦那の宿場の安女郎よ十日も二十日も候りツきり夫
 での何は實明な奉公人の私でも月よ三分の一兩の給金位で飯も炊バ店の事も賄なつ
 ての餘り馬鹿さが嵩じるゆる駈出と氣よるなつこのサ夫をも一向察せせよ二品三品
 店の物が紛失したと此私の所業よささちやア大きな迷惑大方旦那が賣飛し矢張例の
 宿場女郎の股倉といふ土藏の中へ隠込と事ならふねへ昔さんお聞かへ顔よ似合ぬ女

中の語果をたもので有ませんかと捕へし袂を振拂ひ彼の安宿の奥の間をさして這入れ先刻から目ひき抽引シヌくと笑つて居たる白首連がヤレ〜百よもならあいで饒舌損の時間潰〜ホッよ見じめな態でゐる笑止〜と嘲りつゝ是も續いて立入る跡は壓氣を取られゝ以前の婦人斯てゝ幾干争ふも益なき事と思ひしが口惜し泪を呑込でスゴ〜此場を立去りしは是なん中里おきくよて相手の女ハ牛込で召使ひゝるお島といふ流れ渡りの悪妻なり扱行信夫婦親子五人が頼燒の後何處へか轉宅しゝる趣を委しく聞けば傷ましや兄から譲り與へられし親の記念の刀と始め家財の残らせ機失ひ漸々着換の一枚づゝ持出したのみなきに逆も世間人並の住居は出来ぬと紀念て戸部町宇天神山百二十九番地なる怪しき小家と借受て僅よ雨露を凌ぐばかり昨日は變る貧窮の生計よ逆よ立置りしゆゑおきくハ別て心を苦しめ所天行信よ力を添へ乳香兒を抱へて甲斐〜しく手内職に心の盡せと何をいふよも五人の糊口を〜夫等の取入でゝ米の代も引足らせ餘儀なく一枚半枚と頼燒りの衣類を買て

其日〜を繋ぐうち或日野毛の坂下まで彼お嶋も出會しゆゑ持逃とした賃金と少しありと取取て遣ふとおきくが駭く迫り〜も口巧者に言破られ却つて耻辱を受けてゐらゝ口惜く思へど其儘は打過して泣々も憂月日をバ半年餘り涙ながらに稼ぎ〜が習ふより慣るとの此頃まで漸々乳香兒を併せて三人の幼児等よハ空腹泣せる様を事もせ先如何にして其日と送れど是が四五年前よりして續いゝ難儀をし居ゝなら小供ながら其氣よて衣類請願もせまじきを一旦樂な身よなりし夫等の癖が失から近所の子供が折々よ着換て出るを見るよ付け母さん何卒坊よもと豊次郎を始として信太郎も一所よなり譯も知らせよいびらるゝを欺〜窮める母のおきくが其時々のお思ひと察する夫行信も俱に昔しを忍びつゝ我身の上と省みて假托涙よ暮る日の月よ幾回か多のり〜が斯る歎きを見やうより車事の事よ身を落し人力車をバ挽んど迄決心せしを女氣よおきくハ暫しと押留め其御新發ハ婿しゝ貴郎が斯し〜厄難に罹つゝ難澁なるのを氣の毒づつて何方へか周旋しやうと仰やつゝ御方も有を今爰で

人力車を引く何かの妨げマア兎も角も此儘で暫時辛抱しく居てと言きて見れば夫も道理第一馴ぬ力業を始めて若や身体でも痛めた時の詮ない事と心細くも行信は是まで通り内職を一心不乱に稼いで居ると二三日前何となく気分が常より變りしも露座の障り有ふものとおきくにも嘸しをせず一人怠儀も思うち或朝早く起出で楊枝と遣ひし其時よカッと吐る痰ども血の交りし行信が扱へと深く驚きしが忽地覺ゆる胸痛は内職は掛る氣も失く寒熱がそると音なりて再度枕より着たるは是非も泪の種なりかま

○ 第十六章

中里行信が病の床に臥る日より苦しみの彌増とのみか息切の強くなるのに起兼て四五日立ば少しいと於病が心を痛めながら買薬は全快と願みよしとる甲斐もなく夫の病氣は十日過廿日立ても一向は快氣の様子が見えざればおきくはますし氣と揉で頼く近所の醫師を迎へ今の女の手一ツは子供の世話ら病人の看護ハ素より藥の

代殊よ苦一其日の事まで身を粉にあして立働けど夫と二人稼いでさへ足らぬ懸ある取入ゆる心のとやとと夫と色に時間のみ潰して此節では一人前も漸々よ取るか取らぬの仕未からはでハ親子五人の者が飢て死するも遠からト幸ひ手藝も有とゆゑと思ひ定めて行信の病苦の間を親ひつ心の丈を打明しく早速長男豊次郎を膝元近く招き寄せ其方も最早十歳をればよく此母の言ふことを聞分くれとさまゝと思ふ次



第と唄く言聞すきバ豊次郎は殊勝も黙頭てそんなら明日から母さんと居留地の商館へ一緒よ茶をこさへ行くの夫何より嬉しいが然うして家の父さんのお世話の誰がしますへと言きて何と返答さへ泣き泣れぬお菊の悲しさオ、よく其處よ氣が付さお前も知て居やる通り父さんの病氣の別段これといふ程のお苦しきも無い事ゆゑ私のお側も居ないでも信太郎に言付てお藥丈と上る様よして置ふから其邊の必ず心配しあさんかと尙も委細を含ませた後或人に頼み込み翌日よりお房を背負ひ豊次郎と引連てお菊の亞米利加一館番へ茶焙よと出掛て行さ忙しい折の明四時から我家を出る勉強と豊次郎が歳よ似氣なく母の語をうち守り他目も觸らず働く人にて勝れく手間賃を餘計に貰つく歸るので行信と嬉しくも又苦心とバ想像りましくや遊び盛りなる信太郎まで親の爲と幼な心よ思ひ詰煎じてくれる藥をハ飲むに付ても咽かへる涙も間もあらざりしがその便なきを見兼ねくの或夜お菊や豊次郎が晝の草臥歸つての看護の勞きよグツスリと寝入し様子を見済しく密と臥蓐を脱出し忍び足よ

て勝手へ行き出刃を取るより早く咽喉へグサと突立んとわせる機會に足を滑らせハツタリ倒るゝ物音を豊次郎が目疾く目付てア父さんがと起上り走り寄りつゝ、絶り付ばお菊も是よ飛起て何事ならんと行燈を片手に其場へ立出て斯と見るより打驚き持たる刃物を危くも漸々もぎ取り傍へ置きまづ兎も角もと行信を破き薄團の上へ運行きさて何ゆゑよ此仕末と母子右より左より涙ながらよづぬきば行信のせき上る苦痛を堪へて吐息つきその驚きハ尤もあきと私か是まで仕來りし事をつくゝ考へよばお菊其方よ此様な辛い悲しい目とさせるも悉皆此身の不量見夫も身体が壯康ならまた慰める事もあらふの當座の事と思つた病氣が最う今月で百日餘り夫もせめてハ額焼よ逢ぬ前なら是ほどの難儀をさせもしまひなきと其後は外へ出掛るよも着換一枚あき迄よ零落果た意氣地なきその不甲斐ない私をも所天と思つて呉さばこそ今日の活計よ困る中で醫者よ藥と心配を年端も行かぬ子供まで一緒よあつて爲てくれると見聞する度嬉しいやら又悲しさよ幾度となく結句此身の死なら少しハ樂

も出来るであらふと思つた事もあつたれど死ぬるハ易しと思ひ返し空く世話になつて居るうちこのみよしなる静岡の母の疾よ世を去つて今でハ兄の義信どのも彼の地よ居られぬと人の噂よ聞ふ後ハ不孝の罪でも此位の憂目の我身よ報ひもしやうが夫を科なき其方達へ何時まで野面く掛るのが氣の毒さよ堪り兼跡の嘆きよ替らせずと思ひ定め今宵の仕儀所詮癒らぬ病氣ゆゑと息をつぎ物語る覺悟の語を聞よりも思ひを立る泣聲と傍よ寝て居る小供等の耳よ入をじと喰しめて又しても其様を悲しい事と仰やいませと親を亡した心細さハ私とても同じこと假令此先ど程の悲しい目とハ爲ますとも何時かハ貴郎の病氣を是非とも癒しやしいと夫はつゝのりを樂みよ斯して小供と相手よし心を盡して居ますよ貴郎が其様お心が有てハ明日のら仕事よも出掛るそらハ有ませんどうぞ短氣な事などを思ひ立せよ安心して早く全快おそばす機樂を上げて下さいますと漸々よして言出す母親お菊の心中と病苦よ惱む父の心と小供ながらも伶俐の性質夫と察して豊次郎ハ何よも言はず最前より

涙ぐんで居る一が私も是のら骨を折り少ども餘計よ貰つて来てお手助けをしますゆゑ危険い事をなさらずよ氣樂よ養生して下さいモ父さんと手をつらへ父の顔をばさし覗く目元も濕り涙聲聞く行信ハ一々よ後悔しつゝ顔と上げ思ひ過しをしよ爲よ切角勞を休む間の妨げしたに私の誤り最うく決して不所存は起さぬ程よ寢たがよい私も直よ寢ませうと行燈引寄せ挑立る燈火も既よいり土器忽地元の薄闇のり消る間近き身の上よ思ひ合さき行信が其ま、枕よついたのでアレ只今私がと縁しも薄き抱巻を掛ハ一とごと如何よせん綿ハ大概落散く給も同じ程なれば今まで冷くお在のよ是でハ寒さの凌げまいとおきくの四邊を見廻すを豊次郎が見て取て今が二三時を打たから私ハ此ま、起ますゆゑお少さくとも寢衣をと何色が夫と分らぬと扱捨と有る衣類と着換せめて裾でも煖かくと心を配る甲斐なくしよよおきくはいとい喜こんで兎角する間よ商館へ掛出る頃よありしのパキッハリ那と仰やつたが心遣ひであらないから今日ハお前が留守をして父さんのお世話をおしと豊次郎よ言含め其身

お房を脊負つゝ急ぎ商館へ茶焙し出掛行しが前夜の事の心も心よ忘らまを利發
な様でも子供のこと豊次郎一人での何様を油断があらふとも知れまを菊八程よく
取締に断り述べて晝頃に歸る支度をすの處へお竹といふ朋輩が私も家も用ひ有り是の
ら直も戻るのゆる其邊まで一所も参りませうと言まを夫の好い道伴そんなら早くと
連立て歸る途中でお竹が言ふやうお良人の病氣は大層お長い事だがと子供衆の多
い中で貴女一人のお骨折買よお察しやしまを夫も付く無禮な事と是までお咄といた
まを居ましたが福富町三丁目の清正公の境内に假に住つてお在なまを殿村達雄と
いふお方石川縣のお人にて漢家でこそお巧者をお醫者殊も万端慈悲深く實地に
困る病人への何時でも無代で藥まで施してへ心切も療治とあまの評判の實も近來珍
らしいお醫者様でありまをから今の難儀を包ますも明してお頼みなまをつたなら快
く承知してお見舞なまを私に請合さうして都合の好時よ少づづでも藥料を進る
事よなまをつたなら少とはお家も樂でせう全体貴女をお連す一語を添てお願ひやま

と尙更都合が好いのでまを何分今日のと實意の話よ夫へとおきくの會釋しと何より嬉
しい其お話仰やる通り今日よ追れる中での看護ゆる實に當惑して居ませまを何かさう
いふお醫者さま願へる事なら早速も参つてお願ひやしく何ふ直に此様な事をや
すい何とやら餘り勝手な譯でもが貴女お伺つたとやして私のお出ましてもお差支へ
の有まをまいかと問へお竹の點頭て承知あらば早いお肝腎私がお願ひやして見る
とやしと儘も出ましと一寸一言仰れば夫で萬端整ひませう夫なら何を明日と別
れと告て横町へお竹の曲り走去けり

○第十七章

あさくハお竹の後影を暫く見送り思ふやう毎日同じ仕事場で交際人も多し中よ一番
何かお氣を付て親見よ世話をしてくれる那お竹さんも其以前の可也お生計をした
とか夫程あつて物言ひも形粧よ似合ぬまをとやの併しおして骨折をまを居る今の
心中のどんなに辛い事とらふと我身の上に比較べて人の難儀を想像り思まを涙よ暮

たりまが脊負て居る娘を尻の早くお家へ歸らふよと言ふおきくハ心付き毎日
 此様に結付らまぐ窮屈な思ひをきて居る事なきば家へ歸ると急ぐのも無理でない
 と慰めつゝ我家を去る足を早め半町餘り歸り去がヤイ一基を決ちいで嘶をきた
 後モシ萬一殿村さまが承知なくバ却々嘆きを懸る道理夫と思へバ此足で福富町へ
 お咄をするのが先と種々迷ふ心を夫と定め取返して清正公の社内へ這入バ造作
 もなく此家と分つたお菊の喜び頼主主人の達雄老よ面會なえて一伍一什を委ま話
 之治療をバ頼み入ると同人のいと快く請合て明朝早速見舞ゆる必ず心配なさるな
 と噂よ違ハぬ心切の語を聞よりおきくは喜び尙町噂よ頼み置急ぎ我家へ立歸つて嘶
 と嘶せバ行信も其心配と殿村の厚意を深く感心きて明日を遅えと待はると翌朝人力
 車を急がせて殿村達雄の行信の住居へ尋ね來て見るお聞えは勝る貧苦の体殊よ主人
 の容體ハ全く重き肺病に相違なき痛驚き早速藥を調合えて手當方と懇切よ妻
 のおきくよ言聞せ治療も既よ何程の手後の様よ見ゆきと爰で丹誠を盡きたなら今を

盛りの年齢ゆゑ漸々快方する事ならん併え斯いふ病氣なれば十日や廿日で右左とい
 つてハ所詮出來さい相談其氣で随分氣を長く看護なさるが第一と尙種々に論置き
 また近日にお見舞やすが藥ハ何時でも無かり次第遠慮ハ入ぬ取來らまよ然らバお
 暇のさふと戶外へ出れば豊次郎信太郎同じく手をつかへ此上とも又父さんの病氣
 が早く快なるやうよお盡力を願ひますと語る揃へていふ顔をつく見遣りて殿村
 がオ、其方までその委頼決えて心配なさんちと言慰めて歸り去が其後も度々見舞
 よ來て那よ此よと調合よ心を配り去藥の効驗とおきく豊次郎の丹誠が追々見えて行
 信も此節よてハ半日位の床と離る様ゆなりまに何をも聊か安心きて此分ならん思
 ふうち疾より身重よなつて居たおきくが或夜例の通り豊次郎と連立て茶焙場から歸
 る途中フト買物を思ひ出し幸ひ爰よ二人まへ貰つ今日取入を持って居れば通りへ
 出て夫々用を足て來るから其方の先へと豊次郎と歸きておきくハ此時も脊負て居
 たるお房をば抱き下きて手を携へ心の急げと身重の身體殊に漸々立歩行娘を連ての

歩行ゆゑ思はず時刻を移さつゝ、
 用を濟せて二三町我家をよまて
 戻りまゝの來月頃と思ひまゝハヤ
 臨月でありまゝと見え忽地發る腹
 痛のいよゝゝ烈まゝ差込に打驚
 きまゝの往來中兎も角家まで這付
 んとおきくの帯と引ひて心を
 まゝ二足三足歩めば又も突上る痛
 さに堪らざ立止り果し大地へ墜
 ちる事も度々なりまゝのと夫とい
 知らぬ娘お房が空腹なつて來た
 程よ母さん早くお家へと言きて



ハツと身を起さ堪へゝゝて漸々よ我家へ辿り着くが否や玉のやうなる男の兒を易々
 その場へ産落まゝの十二年の冬の事よ都ての人の身の上ならば如何に嬉まき事な
 らんの半年餘り行信の病氣の床よ臥さる中へ今また大事の稼ぎ人よ豫て期えたる事
 といへ産婦となられまゝ差向のその當感と譬へん方なく然りとて毎日歎いても居ら
 れぬ譯と豊次郎よ今の其方一人の稼と一家五人の親と子が杖柱とも思ふなれば年端
 も行ぬ者を捕へ無理を頼みと云親と恨みもまやうが堪忍して相替らす商館へ毎日稼
 ぎに行て呉れ一人となつゝ何のよ付定めて困る事でもあるふが母親さんの快成迄
 些少の處辛抱してと言も涙よ聲曇る父行信の頼の語を聞豊次郎と心得て夫の疾り母
 さんよ盼附らきて居ますから乾度出精まますけと父さんの御病氣も未だ全快で
 い中で悉皆のお世話をなすつゝなら又れ身體よ障らふのと夫のつゝのりが何より心配
 さうのと言て私が出たい時に皆さんがと跡いひ懸て泣沈む年に似氣なき豊次郎が
 三方四方心を配るその心底の殊勝と察する父の行信も何と慰む方もなく溜息吐て

居たりまの豊次郎の子供心よ夫と思ひ定めたか翌日から雨親又言をぬらちよ起出
て支度もそこく一人きて商館へ稼ぎよ行き仕事をまへハ大勢の伴も構の路
と急ぎ我家へ歸つて幾干かの貰ひ物と父よ渡え休息えたが宜からふと言へる語と
耳よも懸せ直さず養焚の事よ掛り豊坊も近來で何のいどうやら出来て來たと褒ら
るるのを樂さみよ赤子(幸藏)の世話のら三人の弟妹の事までも成たけ親の厄介よな
らぬやうよ氣を揉む体を見聞く近所の人々といと慰然の事よ思ひ物など惠み與へ
て其孝心を賞たへへまとい角とるうち産婦おきくの元の身體よなつこので以前の
通り茶焙じよ毎日通ひのきて居をど手を放さぬ幼兒を抱かへての仕事ゆる思ふ
半分も採取ねハ一人迫氣こみ居る折も明きハ明治十三年の二月頃から行信が再び
重き枕よつき切角是まで丹精えたと彼の殿村も氣と揉で頻よ治療よ心を碎けど今
度の漸次に疲勞を増えハヤ如何とも詮なきまで危篤の容体よ立いたりまを夫と明さ
ハお菊ハトめ豊次郎の何様を歎きをどるか想像をハまハ明白よ言葉て追々暖氣よ

向つならと程よく家族に行信の容體を漸え置とく歸るも常の事よて夫等のけ
まさを病人ハ早くも知て覺悟をせまやられさくを枕頭よ呼寄て假令此後ハ何様を事
が有とも零落の障ハ決えて報知まいとの兼々其方よ言ても置たが少ましく思ふ次第も
有れば其方からきて神戸なる小半の許へ頓焼後今度の病氣の体よらくを委ましく文よ
認めて急ぎ郵便で出てくま早くくと何時よなく急こむ語を不審よ思へど兎や角
いへハ逆らふ諱とおさく今の進まぬ心と思ひ直えて言ふがまよ無沙汰をま
たる詫あどを書加へて差立まよ十日程經て小半より返辭の來たよ喜ぶおさくが慌て
ハ良人の枕頭よて封押開て讀下す其文言の概略ハ久々にての御音信嬉しき事と早速
よ拜見いよしいへハ思ひ懸なきは類焼且那さまよ引續き重き枕よふし柴の世よ有
る甲斐も涙のみ拂とせ玉ふと承はる妾の歎きハ如何ばかり殊よ今では大勢の幼少か
こを身一ツよ生育よまふ心遣ひ嘸や便なきおはとらんとね察しやすも泪の種ハ返
辭さへも委ましく認の兼くと肥まよ末よ見舞のし迄に失禮ながら此品を尚こ

の後の月々、御薬料の足も三圓づゝの爲換てあらしく小半より別よ
包んで金十圓添くありたる短かさ文も心の丈を長々筆寫してものし、より遙
か勝る實意の仕向、聞居る行信讀り、あきくも只管その心切を夢のたまで喜
ぶ、付け立先もの、泪なりさて夫より、行信も小半が何時も替らざる厚き心の取計
らひに少しの胸の憂鬱の解しと見えて追々元氣付しを見るよりもあきくと飛立つ
思ひ、豊次郎とも諫め、あましの稼ぎ、骨を折れども病人と抱へた中で次男
信太郎(九)は長女お房(四)と去年生れた幸藏の三人の子供の世話からで、力と頼む
長男の豊次郎さへ漸々十一歳の事なれば、何をさるも足手纏ひと思ふ半分も出来
兼て、まどく貧家に陥りぬ然ども聊の氣を屈せず子供が飢ゑ泣時、或は叱り又は
賺しく身と切より、もいや増る苦しき心を鬼にしつ其日、を送り居るうち、又も小半
の許のらいて約束の三圓の外、五圓といふ金を旦那の寸志と送り届てよこ
た後も續いて毎月恵んで呉れると第一、藥價その他、彼の殿村の厚意から最早一年足

らずにあれど、禮といふのみ何一品持ても行ぬを氣、懸す始終替らず見廻つてと藥を
呉るを此上もあき喜びとぞ居たが、生者必滅の佛教の如く斯まで永年貞操を盡すお
きくと子供ながらも親の爲よと一筋、孝行きて居る豊次郎の身、及ばし、嘆きとい
ふは今の一家一人として親戚といふも無き中、不思議な縁から別れても尚ども、
艱苦を、行末長くと契り置き、別て現時の處で、命の親とも、ゆべき神戸の例の小
半、風邪の心地と打臥え、が忽地重き熱病と變じ十日を過さ、去七月十九日の曉
頃、日影符間の露よりも果敢なく消く、黄泉の客とありしといふ電信が、岡嶋方は同居す
る伯父常造の許からしく中里方へ届さし、のばさらでも危ふき大病の中、よく斯と行信
が聞く驚きと悲しさの打返して、争か堪らんウンと其ま、取詰て息も絶べき有さま
におきくは、慌てふさめきて、豊次郎を急がし立て、殿村氏を呼迎へ早速治療を乞ふるゆ
ゑに間もなく開き、付いかど甚く身體、障りしと見え、暫時の人事も辨まへ、さう折
々、眼を開く、生て甲斐あき、此身の残り生先、長き小半を、出立し苦しむといふか

と思へばうとくと寐入る様
 子に殿村の早是までと診定め
 て屏風の北方で甲斐くく
 働いて居る豊次郎のその志操
 を感賞して否むを強く金三圓
 何氣なく恵み與へ急ぎ我家へ
 歸り行く跡におきくが心細くも夜の目も合
 さでよ看護よ豊次郎と變るくこゝろをつ
 くしく居たりしが行信の漸次よ衰弱身の來
 歴と記したる即はち當篇第六章を讀了りし
 の此世の名残四十一年と一期と去つて明治
 十三年八月十六日の午後十一時よ死去せし



どの是非もなき事どもなり斯と聞くより近所の者があきく親子の愁傷を想像りつゝ
 心々よ手向物など持参して慰めながら來て見せおきくの素より豊次郎の遺骸よ取
 廻り目も當られぬ其傍よ俱々泣居る三人の子供をせめては二三日でも埋葬の濟
 までの互よ引取り世話をせんと言きておきく漸々に氣を取直し亡夫の野邊の送り
 や其他の醫助殿村を始めとし心ある人々の情で泣々濟し、後此上の夫に代り四人の
 子供を未始終天晴世間へ出さんと思ひ立たる積發心初七日の濟を待兼ね自分毎日
 是まで通り豊次郎と連立て其日の生計を立る爲茶焙場へ仕事よ行き我家へ歸るが長
 男よ始め信太郎にも夜更まで手習などを教て居るの苦心の如何あらん薄命といひ
 貞節といひ近來愍然な身の上とよく實際を知る人より親しく聞てと打過兼例の不
 文で長々しく綴りしものと原文よ有を其儘摘録しぬ

(拾遺) 以上中里おきくが貞操の物語の一回繪入新聞紙上よ出より其艱難と貧苦
 を憐れまれ去年の九月十一日の事との形粧も立派な人がおきくの茅屋へ尋ね來り拙

者ハ埼玉縣下浦和宿中町二百二番地の今澤信清とヤす者よて其方の親元細川家とい
 古き由縁のある者あるが目下は難産の趣きの繪入新聞よく委細承知きたり就てハ娘
 此れ房どのハ拙者が當分お預りやまで立派よお生育せよ必ず心配せらるゝなと篤
 くお菊と慰めた後手土産ありと金五圓を惠んでお房を連行せといひ又同ト十八日
 ハ東京三番町五十七番地の芳川頼安といふ人の繪入新聞を持参して「さういふおきく
 の許へ赴のき拙者の母ハ故行信どのハ姉なれば久しく居處の分らぬとく心よ懸て
 居られしうち行信どのが貧苦の中で病死されたといふ事を始めて繪入新聞よく承知
 いふし取ものも取敢ず急ぎ出港いたした譯よてハ二男信太郎どのを當分預りお世話
 といたさんとの嘶におきくハ喜んで同人の語よ任せたきば直よ東京へ運歸りとの
 其後東京芝區南佐久間町一丁目一番地の旅人宿根岸修一郎といふ者がおきくの手一
 ツで多の子供を抱へて居るを愍然と思はるも出港しと二男を貰ひたと言込しよ
 おきくも此上おきく喜びのしよと既よ吉川方へ預けし後なれば一應吉川方へ御相談

下され私の方ハ素より願ふ處どの挨拶ゆる同人ハ取返一彼の伯母に掛合て九月廿
 三日よ更よ信太郎と貰ひ受今でハ絹布ぐるみで同家よ生育られて居るといひ又長男
 の豊次郎も同港南仲通り一丁目の豪商伏嶋近藏が母おきくの生計が立ほどの月給を
 與へて雇ひ入たしとの周旋を繪入新聞の支局青木梅藏かさへ依頼されしより早速お
 さくと呼寄せ其趣きをいひ聞せしよおきくの嬉し涙に沈み頓よ返答も出来かぬる迄
 の喜びなりしかば伏嶋のたへ通知の上九月廿八日より豊次郎ハ同家の雇人よ住込し
 とぞ扱おきく(當時改名お幸)ハ内外國々の慈善者より惠まれし金圓と寄贈せらるし
 物品の夥しきこと算へも盡はどよして新聞紙上の薄命者よは今古未曾有の造化よき
 最珍らしき談話よこそ

籬菊操加々見終

明治十七年五月十五日御届
同 九月九日出板

定價三十五錢

本所區龜澤町壹丁目四十七番地

編輯人

小宮山五郎

日本橋區米澤町三丁目壹番地

出版人 金幸堂

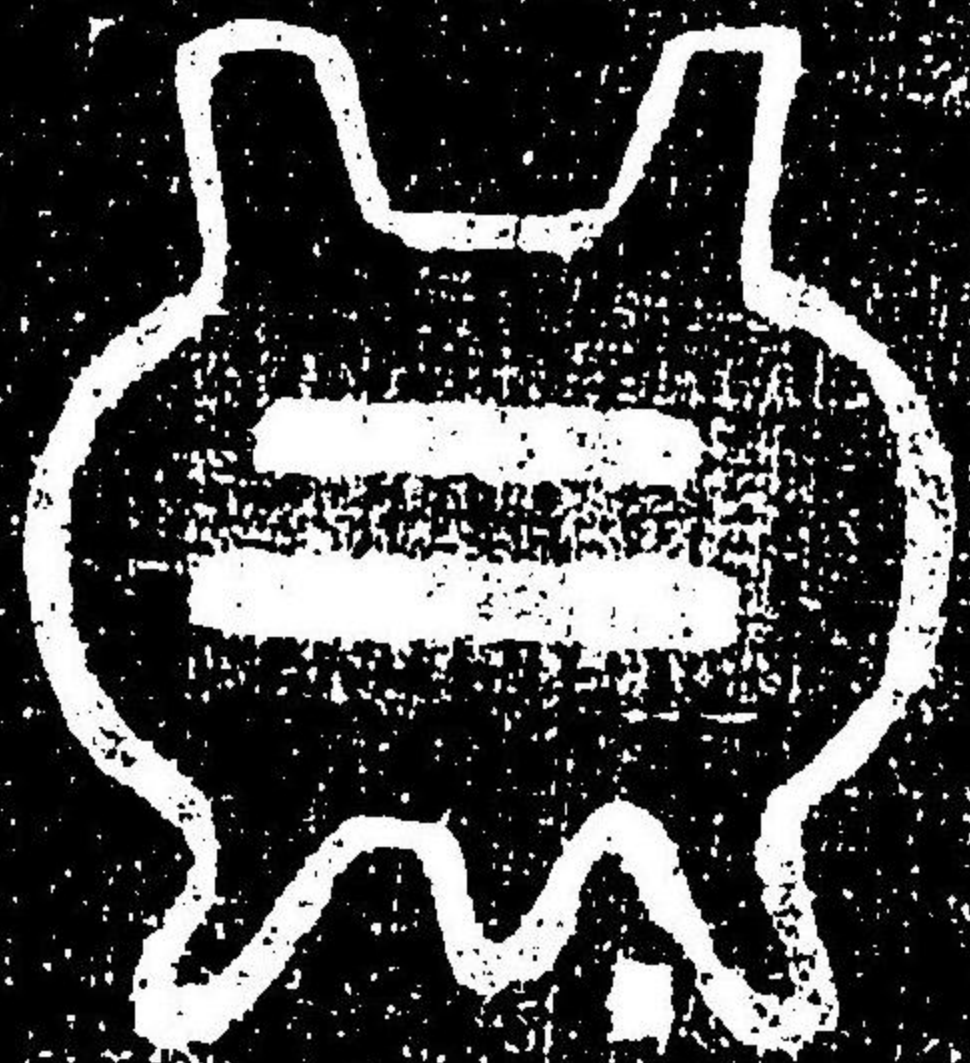
稻垣良助

同區橋町三丁目十番地

發兌元 金榮堂

牧野惣次郎

東京地本問屋組合





091367-000-6

特43-82

籬の菊操加々見

小宮山 五郎/編

M17

DBN-2265

